

社会的比較の発達過程に就いて

—青年期から老人期に至る実証的知見の展望—

高田 利 武

I. 緒 言

社会的比較の発達研究：自己の様々な特性を他者と比べる社会的比較についての組織的研究は、Festinger (1954) の社会的比較過程説 (theory of social comparison processes) の公刊を以てその嚆矢とする。爾来約60年、社会的比較研究は質量ともに飛躍的な伸展を見せている (Blanton & Stapel, 2007; 高田, 2011)。他方、そのような一般的傾向とは対照的に、自他の比較を巡る諸心理過程に関する発達の研究はさほど多くは行われていない。しかしながら、社会心理学領域における圧倒的な研究量に比べれば遜色があるとは言え、発達の観点に立った社会的比較研究も少なからぬ量に上っている。

それらの研究は大別すると、1)社会的比較の機能、2)社会的比較の実態、に関するものが多い。幼児の示す社会的比較には、Festinger (1954) が社会的比較過程説で展開した自己評価機能は見られないとの指摘 (Veroff, 1969; Rable, 1983、後述参照) に端を発し、社会的比較の心的機能の発達の変化を検討するのが前者である。後者は、自己評価 (self-evaluation)、自己高揚 (self-enhancement)、自己向上 (self-improvement)、自己融合 (self-harmonization) など、様々な機能を持つ社会的比較 (Wood, 1989; 高田, 2011) が、発達の各段階の諸心理過程において如何なる様態を示すかを検討するものである。

前稿 (高田, 2009) においては、幼児期から青年期に亘る主要な実証的研究を総覧したが、扱う発達段階の関係上、そこでは上記1)に係わる研究が少なからず見られた。本稿は、前稿に引き続き青年期以降での実証的研究を展望するものであるが、従来論じられている社会的比較の果たす機能の背景となる心的能力は、この発達段階では十分に備わっている。したがって、今回取り上げる研究の大部分は上記2)に属するものである。いずれにせよ、社会的比較に関する発達の検討にとって、1)2)は相補的関連を持つと思われる。而して、そのためには一定の理論的枠組みを必要とするであろう。

社会的比較の発達に関する理論：しかしながら、そのような理論構築の試みは現在のところ極めて乏しい。それらを概観すると、Rable (1983) は社会的比較には幾つかの水準があり、それぞれ異なった時期に発達することを指摘している。即ち、社会的比較の前提となる要因 (他

者の能力の個人差や成績の相対的位置を認める基本的認知能力、比較に対する関心や動機づけなどは、概ね6歳頃までには発達する。しかし、他者との比較から得られた情報を分析・処理・推論するための要因（成績の比較から能力の水準を推論する抽象的認知能力など）は、7歳から9歳にかけて発達する。したがって、幼児・児童の行う比較では、自他の類似性に基づく規範習得・関係維持機能は自己評価機能よりも主要であるとしている。

一方、Veroff (1969) は達成動機の発達について以下のように論じている。即ち、達成動機には自律的達成動機 (autonomous achievement motivation) と社会的達成動機 (social achievement motivation) とがあるが、自分自身の内面的な基準を達成しようとする前者は2歳前後から発達する。一方、他者に対する優越の基準を達成しようとする後者は他者との比較を前提とするが、それは他者と比べた成績評価を受ける機会が増える7歳前後から発達する。したがって、この観点に従うなら、自己の成績を明確にしようとする自己評価機能、あるいは他者の成績を凌ごうとする自己高揚機能を持つ社会的比較は、児童期中期頃までは見られないこととなる。

更に Butler (1995) も、達成動機の観点から社会的比較の機能について論じている。即ち、達成動機の目標には習熟目標 (mastery goal) と成績目標 (performance goal) とがあるが、これは Veroff (1969) のいう自律的達成動機と社会的達成動機に略対応したものである。そして、習熟目標・成績目標のいずれの下でも、他者の成績に関する比較情報は、技能習熟による自己向上と、自己の位置を明確にする自己評価の目的のために有効である一方、社会的比較情報は技能習熟（自己向上）と自己評価の双方に用いられるのは児童期中期以降であり、幼児期では専ら技能習熟のために用いられる (Butler, 1989)、としている。

これらの理論的考察は、いずれも幼児期から児童期にかけての社会的比較の機能を論じたものであるが、自己評価機能に焦点をあてて生涯発達モデルを提唱しているのが Suls & Mullen (1982) である。彼等は能力の自己評価手段として、1)類似他者との社会的比較、2)非類似他者との社会的比較、3)継時的比較、を取り上げ、これらの基準のいずれが中心となって自己概念が形成されるかは、個人の認知能力と周囲の社会的状況によって決まり、したがって生涯に亘る発達の各時期で異なる、としている。このモデルでは、幼児・児童期初期と老人期では3)、幼児・児童期中期と中年期では2)、幼児・児童期後期、青年期、若年成人期では1)が、それぞれ自己評価を行う際の有力な基準となるとされる。

本稿の構成：このように、社会的比較の発達に関する諸理論的考察のうち、青年期以降を射程に入れているのは Suls & Mullen (1982) のみである。一方、青年期以降の社会的比較の発達に関して、このモデルに沿って行われた研究は極めて少ない（例えば、Suls, 1986;高田, 1993）。多くは社会的比較自体の研究における理論仮説（高田, 2011参照）に依拠するか、当該発達段階に固有の現象に関わる心理過程について社会的比較の観点から解明を試みたもの、即ち、前

述した2)社会的比較の実態、に属する研究である。そこで本稿では、そのような諸研究のうち、各発達段階でとりわけ顕現する以下の問題において社会的比較が果たす役割を検討し、一定程度の集積が見られる実証的知見を展望する。即ち、青年期では身体像と摂食障害、成人期では結婚生活と職業生活での諸問題、老人期では心身健康の減衰・維持、である。

一方、癌をはじめとする疾病患者の心理過程を社会的比較の観点から扱った研究も少なからず存在するが、そこで問題とされている諸疾病は必ずしも特定の発達段階に特徴的なものではないため、本稿では割愛した（なお、この問題について1990年代までに公開された諸研究の展望については、高田（1998）及び Tennen, McKee & Affleck（2000）参照）。更に、社会的比較過程それ自体を対象とした研究、就中、実験的研究の殆どは大学生を参加者として行われているが、それらが発達の観点から大学生を対象としている訳では勿論ない。したがってそれらの研究についても本稿の対象とはしない。

II. 青年期における身体像に関わる問題と社会的比較

身体像への関心と社会的比較：思春期発育に伴う身体的変化と性的成熟は青年期の先魁であり、児童期から青年期への移行の背景の1つである。思春期発育の中では、体重や身長などの属性の個人間分散が増大し、それが身体像の不明確さを生み、自他の身体の比較への志向性をもたらす可能性が指摘されている（高田・丹野・渡辺, 1987）。

これに一致する知見として、Suls & Mullen（1982）のモデルに依拠した高田（1993）の調査がある。これは、自己概念の様々な側面を自己評価する際の基準について、同年齢他者との社会的比較、異なった年齢の他者との社会的比較、過去の自分自身との継時的比較のいずれかの選択を求めるものである。性格特性や知性等の内面的側面に比べ、容姿などの外面的側面で、同年齢他者との社会的比較の選択率が高い傾向が、日本人大学生では中年成人よりも顕著であることが示されている。

オーストラリアの中学2・3年生を対象とした Davidson & McCabe（2006）の調査では、女子は男子より容姿を他者と比較する頻度が多く、身体像への不満や身体に関する不安や向上への願望が高いことが示されている。これは、一般に女子は男子より思春期発育が早期に発現する傾向と対応している。また、身体像への不満感足は自尊心や対人関係に否定的な影響を及ぼしているが、身体像の比較頻度と身体像不満感との関係は詳らかではない。

青年期の身体像と社会的比較の関連について実証的に検討したものとして、Jones（2001）の知見がある。中学1年生と高校2年生を対象とした調査により、同性の友人やメディアに登場する有名人との比較頻度は男子よりも女子、中学生よりも高校生に多いこと、比較頻度が多い生徒は身体像に対する不満が高いこと、ただし実際の体型などの身体特性が身体像に対する不

満を強く規定する要因であり、比較頻度の影響力は小さいことが示されている。しかし、Jones (2004) による中学生から高校生にかけての縦断調査では、年齢の上昇に伴う比較頻度の増加とそれによる身体・性的特性の自己評価の低下は確認されていない。

社会的比較による自己評価の低下：上述の Jones (2001) の知見では、比較頻度の多さは身体像への不満をもたらすことが示されているが、これは上方比較が惹起する対比効果、即ち、自分より容姿の優れた他者と比べた結果、自己評価が低下する可能性を示唆している。そして、これを実験的に確認した嚆矢が Cash, Cash, & Butters (1983) の知見である。女子大学生を対象としたこの実験では、参加者は多数の若い女性の写真の魅力などを評定した後に、容姿の自己評価を行うが、評定した写真が美人である条件では不美人である条件よりも有意に容姿自己評価が低いことが示されている。但し、写真が著名なモデルである条件では、容姿の自己評価はさほど低下しないことが着目される。

Thornton & Moore (1993) は、そのような身体・容姿の上方比較がもたらす自己評価の低下は、女性のみならず男性にも見られることを示す実験を行っている。各種の心理検査に回答する際、容姿の優れた同性の写真が掲示された条件と掲示のない条件が操作され、写真がある場合には身体の自己評価だけでなく自尊心も低下し、公的自己意識や社会的不安は高まる傾向が、男女を問わず認められたのである。更に、このような上方比較だけでなく、容姿の劣った写真を掲示する下方比較条件も加えた別の実験では、身体自己評価と自尊心は、写真のない統制群に比べ上方比較条件では低下、下方比較条件では上昇する対比効果が得られている。

このような社会的比較の効果は、他にも様々な比較の様態を通じて示されている。Heinberg & Thompson (1992b) は、正常範囲の体重の女子大学生が参加した、測定された体重は平均以上、あるいは平均以下であるという偽フィードバックを与える実験を行っている。その際、平均値が在籍する大学の平均（特殊的比較）であるか、アメリカ市民の平均（普遍的比較）であるかに拘わらず、平均以下、即ち上方比較情報が与えられた場合は、平均以上、即ち下方比較情報が与えられた場合よりも、自分の身体像を想起した時の不快や不安が高いことが示されている。

Krones, Stice, Batrew, & Orjada (2005) は、痩身の美人、あるいは魅力的ではあるが通常体重のサクラと同席した前後での、身体不満足や否定的感情の変化を検討する実験を、女子大学生を参加者として行っている。結果は、痩身美人と同席した場合に身体不満足は上昇するという、上方比較の対比効果を示したが、気分に対する影響や生理指標の変化は見られなかった。更に、このような比較の効果は、痩身を是とする社会・文化的規範の内面化、規範の圧力の知覚（後述参照）、身体的魅力の自己評価、などの変数によって調整される、という仮説は支持されていない。

一方、Faith, Leone, & Allison (1997) は、身体像に影響する社会的比較を、状況的なものと特性的なものに分けて検討を加えている。前者は、上述の諸実験と同じく操作された比較相手によりもたらされるものであり、この実験では実験参加者より身体的に優れた、あるいは劣った同年齢の他者1名を想起し記述する、という操作が行われている。後者は、日常的に他者と身体と比較を行う傾向を測定する尺度 (Thompson, Heinberg, & Tantleff, 1991) が用いられている。男女の大学生を参加者としたこの実験では、実験的に操作された上方及び下方比較は何等影響を及ぼさない一方、特性的な社会的比較傾向が高いほど身体不満足や身体像自己評価は低いという結果が、性別に関係なく示されている。

これらの諸研究は上方比較での対比効果が明らかであるが、上方比較には同化効果、即ち自分より優れた他者との同一視などを通じて、自己評価が上昇する場合もあることが指摘されている (高田, 2011)。Jones & Buckingham (2005) の女子学生が参加した実験では、呈示された刺激人物の美醜により下方比較と上方比較の条件、及び刺激人物のない統制群が操作された後、身体についての自己評価が求められている。結果は、状態自尊心が低い者では、統制群より自己評価は上方比較条件では低く下方比較条件では高いという対比効果が見られた一方、状態自尊心が高い者の場合は、下方比較条件より上方比較条件で自己評価が高い、即ち同化効果が認められており、状態自尊心が調整変数として作用することが示唆されている。

社会的比較と摂食障害：身体の社会的比較は単に身体像に影響するだけでなく、それに基づく不適応症状、即ち過食と拒食をくり返す摂食障害に関係することを示している調査も多い。Crandall (1988) は、集団内での自他の比較から生じる斉一性への圧力が、摂食障害の原因の1つであることを示している。大学の女子学生クラブで、摂食障害行動が多い学生ほど友人集団の中で人気が高い傾向や、友人集団での平均的な摂食障害行動を示さない学生は人気が低い傾向が認められ、また、友人集団の凝集性が高いほど摂食障害行動が多い傾向も見られたのである。摂食障害の原因として、後述するように社会・文化的要因 (痩身を美とする社会的規範など)、臨床・精神医学的要因 (抑鬱など)、統計的危険要因 (身体像・性役割など) があるが、このような社会心理学的要因も無視できないと Crandall は指摘している。

身体の社会的比較と摂食障害との関係を直接検討したのものとして、Heinberg & Thompson (1992a) の研究がある。男女の大学生を対象とした調査を通じて、級友や大学生の平均との全般的比較、著名人との全般的比較比較、容姿など外見に関する比較、の各社会的比較のそれぞれの重要性を高く評価している者ほど、身体不満足、瘦身願望、摂食障害の傾向が強いが、それは女子学生のみに見られ男子学生では見られないことが報告されている。

女子大学生を対象とした調査資料に対する共分散構造分析を通じて、Thompson, Covert, & Stormer (1999) は以下の因果モデルが妥当であることを示している。即ち、初潮年齢など成熟

が早期であるほど摂食障害の症候が多く、また、体重など身体に関連したいじめを受ける機会が多いほど身体像の自己評価は低くなる。これら2つの影響過程には、直接的影響と社会的比較を媒介とした間接的影響とがある。後者は、成熟時期が早いほど、及び、いじめ経験が多いほど、身体に関する社会的比較の頻度が多くなり、比較頻度が多いほど摂食障害あるいは身体像低下が増大する。更に、身体像自己評価が低いほど、摂食障害傾向も高くなる、というモデルである。

Morrison, Waller, Meyer, Burditt, Wright, Babbs, & Gilbert (2003) は、摂食障害と診断された臨床群 (18~63歳) と、臨床所見のない統制群 (17~36歳) の2群の一般女性に対する調査により、摂食障害と社会的比較を行いやすい性格特性との関係を検討している。前者は摂食障害質問票 (Garner, 1991)、後者は社会的比較志向尺度 (Gibbons & Buunk, 1999) という、いずれもこの領域では一般的な尺度が用いられている。それによれば、臨床群では両者の間に正相関が見られるのに対し、統制群では相関はないことが示されている。

Corning, Krumm, & Smitham (2006) もまた、摂食障害の症候を示す症候群と、そのない症候無群の2群の女子大学生の差を検討している。この調査では、症候群は症候無群に比べ、測定された社会的比較志向や身体に関して上方比較を行う傾向が有意に高い一方、特性自尊心は低いことが示されている。更に、身体上方比較の頻度が高い者ほど特性自尊心が低く、特性自尊心が低いと摂食障害の症候を示すという、特性自尊心の媒介効果も示されている。

更に、Green, Scott, Cross, Liao, Hallengren, Davids, Carter, Kugler, Read, & Jepson (2009) も、男女大学生を対象とした調査を通じ、身体に関し上方比較する傾向、身体不満足の高さ、特性自尊心の低さはいずれも摂食障害傾向を導く一方、抑鬱の程度も摂食障害の有意な予測因子であることを示している。殊に、抑鬱の効果により身体上方比較の効果は消失することが、この調査では示されている点が注目される。

メディア接触の影響： 上述した諸研究は、身体や容姿に関する上方比較が身体像自己評価の低下や摂食障害の原因となることを示唆している。そのような身体の上方向比較は、テレビや雑誌などのメディアとの接触によりもたらされることが指摘されている (Groesz, Levine, & Murnen, 2002)。メディア上では、極端に痩身の美人モデルが登場することが多いからである。メディアモデルとの接触と身体に関する諸自己評価との関係を実験的に検討した研究は多数あり、Groeszらのメタ分析によれば、効果の程度はさほど高くないものの、モデルとの接触が身体像に否定的な影響をもたらす傾向がほぼ一貫して見られている。それらの研究の中で、社会的比較に直接言及しているものの幾つかを以下に概観する。

Irving (1990) は、女子大学生に対する過食診断検査の結果に基づき、過食症候高・中・低の3群に分けた上で、各種広告から採録した痩身モデル、正常体重の一般女性、肥満モデルの

いずれかの写真を呈示し、その後身体に関する諸自己評価や自尊心を測定する実験を行っている。瘦身モデル写真を呈示された場合は、他の場合よりも体重に満足する程度と自尊心が有意に低いという結果、即ち上方比較の対比効果が、過食症候の3群に共通して認められたが、性的魅力や身体健康状況の自己評価には3群間で差がないという結果が得られている。

Martin & Kennedy (1993) も、女性モデルとの比較によって身体的魅力の自己評価が変化するかを検討する、小学4年生・中学2年生・高校2年生女子を参加者とした実験を行っている。魅力度の異なるモデルを含む広告を呈示した後に、モデルと比較した程度、身体像の自己評価などを測定した結果、年長になるほどモデルと比較する傾向は高まり、モデルの魅力の程度に敏感になり、また身体像の自己評価は低くなるが、モデルとの比較が直接的に自己評価を低下させる傾向は認められていない。

実験的研究ではないが、Morrison, Kalin, & Morrison (2004) の知見も、テレビ番組や雑誌などのメディアに登場するモデルが身体を巡る否定的効果をもたらすことを示唆している。カナダの男女の高校生に対する調査を通じて、男子より女子にモデルとの比較が多いこと、また、モデルとの比較が多いほど、身体像の自己評価の低下、身体満足度の低下、病理的な体重調整などが、男女に共通して見られることが示されている。

このように、メディア上の女性モデルとの接触は総じて否定的効果をもたらすと言えるが、それは必ずしも一律に生じるのではなく、何らかの調整変数が作用する結果として否定的結果が生じない個人もあることを、最近の研究は示している。一例として Posavac, Posavac, & Posavac (1998) は、身体不満足特性の高い女子大学生と低い学生とで、瘦身モデルとの接触の効果が異なることを示す実験を行っている。即ち、モデルとの接触により自身の体重への関心が増大したのは前者のみであり、後者は全く影響を受けないことが示されている。

更に Patrick, Neighbors, & Knee (2004) は、女子大学生を対象とした実験を通じて、随伴性自尊心 (contingent self-esteem: 何らかの基準に合致しているか否かで変動する自尊心) の高い者、その中でもとりわけ身体的魅力の自己評価が低い者は、女性モデル接触後の身体像自己評価の低下や否定的感情の生起が認められるが、随伴性自尊心の低い者では、特に比較を強制しない限り、モデル接触による否定的効果は生じないことを示している。

肯定的効果: このような調整変数の存在は、モデル接触の身体像への否定的効果が生じない場合だけでなく、肯定的効果が生じる可能性をも示唆する。van den Berg & Thompson (2007) は、様々なメディア上で収集された写真から予め予備調査を通じて選択された、魅力的あるいは非魅力的な女性のスライドが呈示される上方比較あるいは下方比較、更に呈示のない統制の各群を含む、女子学生対象の実験を行っている。下方比較群では、上方比較あるいは統制群より容姿に対する満足度と自信は上昇したが、上方比較群と統制群との間に差は見られなかった。

これは、実験参加者の実験前の容姿満足度がさほど低くなく、瘦身モデルがそれに近づく目標となり鼓舞されたためと、van den Bergらは推測している。なお、この実験では社会的比較と身体像活性化の相乗効果も検討されているが、活性化の効果は認められていない。

この実験から示唆されるように、上方比較が鼓舞 (inspiration) のような肯定的効果をもたらすことは前述したが、瘦身モデルの肯定的効果は、Joshi, Herman, & Polivy (2004) の知見にも現れている。女子大学生に瘦身モデルあるいは製品のみをの広告を呈示した後、自己評価や気分を測定したこの実験では、ダイエットなどの食餌制限傾向の強い者は、製品広告より瘦身モデル広告を呈示された場合に社会性に関する状態自尊心と自己イメージの評価は高いが、食餌制限傾向の弱い者の容姿状態自尊心評価は製品広告よりモデル広告を呈示された場合に低いことが示されている。即ち、食餌制限傾向がモデルの肯定的効果と否定的効果を調整している一方、食餌制限傾向の高い者がモデルによって鼓舞されたことを示す証左は得られていない。

同じく Mills, Polivy, Herman, & Tiggemann (2002) も、食餌制限傾向が瘦身モデルの鼓舞効果を調整する変数であることを示す、女子大学生を参加者とした略同様の実験を行っている。この実験では、食餌制限傾向の強い者が瘦身モデル広告に接した後は、容姿に関する状態自尊心の上昇に加えて、食餌制限傾向が緩和されることも示されている。更に、そのような傾向は、食餌制限による瘦身達成の可能性を示唆された場合に顕著であることも示されている。

上方比較の肯定的効果、即ち、瘦身モデルとの同一視や鼓舞などの影響を示す他の研究として、女子大学生の参加者に対する Wilcox & Laird (2000) の知見がある。この実験では、瘦身モデル、あるいは通常体重の女性の写真を呈示した後に身体像や感情を測定する、という前述の諸実験と略同様の手続きが用いられている。事前の実験操作と測定によって、自他の関係を認知する際に、自己の姿を積極的に覚知して他者と対比的に捉える傾向のある者と、あまり覚知せず他者と同化的に捉える傾向の者との、参加者は2分されたが、前者では体重評価、自尊心、気分に対する瘦身モデルによる否定的影響、後者では肯定的影響が生じたことが報告されている。

Halliwell & Dittmar (2005) は、上方比較の対比効果と同化効果を調整する要因として、社会的比較の動機に着目した実験、即ち、自己評価動機の下では対比効果、自己高揚動機の下では同化効果が生じることを仮説とする実験を行っている。女子大学生を参加者としたこの実験では、瘦身モデルを含む広告と製品のみをの広告のいずれかが呈示され、広告を評価することが求められるが、その際、自己評価あるいは自己向上への構えが操作される。従属変数として測定された身体不安について、自己評価条件では瘦身モデルとの対比、自己向上条件では同化が見られ仮説は支持されている。更に、日頃から身体について他者と比較する傾向が低い者にこのような傾向が顕著であることも示されている。

更に、Tiggemann, Polivy, & Hargreaves (2009) も上方比較の肯定的効果を明らかにし、それ

を惹起するのはモデルと同一化する幻想 (fantasy) であると断じている。即ち、女子大学生が参加した実験で、瘦身モデル広告と製品広告のいずれかが呈示された後、身体満足と気分が測定された。広告の評価が求められる際、評価の内容によって、モデルと自己とを比較する構えと、モデルの生活等を空想する構えとが操作される。結果は、前者の構えでは従来の諸実験と同様、瘦身モデルを含む広告との接触による否定的効果、即ち対比が見られたのに対し、後者の構えでは、モデルを含む広告が呈示されたほうが、身体満足と気分は肯定的になるという、上方比較の同化効果が見られたのである。

社会的比較の媒介効果：これまで概観してきたように、メディアとの接触が否定的な効果をもたらすことが多いが、メディア上のモデルとの比較がそれを媒介していることが示唆される。そのような社会的比較の媒介効果を示唆する、あるいはそれを直接的に検討している幾つかの研究がある。

Patrick, Neighbors, & Knee (2004) は前述した実験に加えて、女子大学生を対象とした調査も行ない、随伴性自尊心の高い者がモデルを含む他の女性との接触の後に否定的な気分を体験する過程には、他者との上方比較が媒介することを明らかにしている。特にこの研究では、日常生活における社会的比較の頻度、相手、対象、方向などを検討するために、社会的比較記録 (Wheeler & Miyake, 1992) を用いた10日間に亘る資料を分析している点が注目される。

女子大学生を対象とした Tiggemann & McGill (2004) の実験では、呈示する商品広告 (製品のみ、製品と瘦身モデル全身写真、製品とモデルの身体の一部、の3条件) と広告に接触する際の心的構え (広告効果を評価、モデルの容姿を評価、モデルと自己との差異を評価、の3条件) が操作され、身体に関する自己評価と気分に加え、モデルと自分とを比較した程度が測定された。身体自己評価に関しては広告がモデルの全身写真、部分写真、製品のみの順に有意に低い一方、気分については広告内容と構えの交互作用が見られ、モデルとの差異に着目した比較構え条件では、全身モデルが最も否定的な気分を惹起した一方、他の2条件では全身モデルはさほど否定的な気分の原因とはなっていない。更に、瘦身モデルが身体自己評価の低下や否定的気分を引き起こす過程では、自分とモデルとを比較する程度が媒介変数として作用していることが明らかにされている。

Tiggemann & Slater (2004) の女子大学生に対する実験では、参加者は各種の音楽テレビ番組を数分間聴取した後、身体満足と気分について回答する。番組に登場する人物が瘦身美女の条件と一般女性の条件とがあるとともに、前述した Tiggemann & McGill (2004) と略同様の手法で比較構え条件と非比較構え条件とが操作されている。構えに関係なく、身体満足の程度は一般女性番組より瘦身美女番組を聴取した条件で有意に低く、更に、瘦身美女への接触が身体不満足をもたらす過程を、聴取中にモデルと比較した程度が媒介していることが示されている。

なお、気分には条件による相違は見られていない。

更に、Bessenoff (2006) は女子大学生を参加者とし、痩身モデルを含む広告あるいは製品のみの広告を呈示した後に各種の測定を行う、これまで見てきた諸実験と大略同様の方式の実験を行っている。痩身モデル広告の評価を行った群は、製品広告を評価した群よりも、身体満足、抑うつ傾向、気分、容姿状態自尊心などで、自己評価が有意に低いという結果が得られている。更に、それらの結果は、広告評価中に自己とモデルを比較した程度が媒介するとともに、身体像に関する自己較差 (理想と現実の差: Higgins, 1987) の大きい者に著しいことが確認されている。

社会・文化的規範の影響: メディア上に見られる女性が極端に痩身であり、またその影響力が大きいのは、痩身女性を理想とする社会・文化的規範が存在するからであり、したがって、これまでに概観してきた社会的比較やメディアとの接触が身体像や摂食障害に及ぼす効果には、そのような規範が作用していることが考えられる。一例として、Stormer & Thompson (1996) による女子大学生対象の調査においては、日常的に容姿の比較を行っている頻度、美醜についての社会的規範を意識する程度、規範を内面化している程度、身体像自己評価、摂食障害の症候、などが測定されている。規範の意識と内面化の程度、及び、社会的比較の頻度は、身体像自己評価の低下と摂食障害症候に有意に影響していることが重回帰分析によって示されている。社会的比較と並んで、既存の社会的規範の受容が女性の身体像に係わる障害をもたらしていることが示唆される。

魅力的あるいは痩身モデルへの接触が身体像に対して否定的影響を及ぼすか否かを、規範の内面化の程度が調整しているかを検討している研究は多いが (例えば、Halliwell & Dittmar (2005) など)、そこで社会的比較が果たしている役割を直接的に検討している研究が幾つか数えられる。Englen-Maddox (2005) の女子大学生を対する調査は、痩身を理想とする規範の内面化と身体像に対して、メディア上のモデルとの接触が及ぼす影響を問題としている。女性モデルが載った女性雑誌広告が呈示された際、脳裏に浮かんだ思考の自由記述を分析した結果、モデルへの批判的記述が最も多く、モデルとの上方比較がそれに次ぎ、モデルの下方比較が最も少なかった。しかし、批判的態度は身体像の諸側面に何らの影響も及ぼしていない一方、社会的比較に関して多く記述した者は、身体不満足度が高く痩身美規範を内面化している程度も高い傾向が認められた。但し、社会的比較、規範の内面化の程度、身体不満足との相互関係については詳らかではない。

一方、Tsiantas & King (2001) は、年齢の接近した青年期の姉妹間の容姿の比較と、身体像の障害あるいは文化的規範の内面化の関係を検討している。姉妹の双方とも、容姿についての文化的規範に沿った態度を持っているほど身体不満足の高く、また、姉妹間での社会的

比較が多いほど身体像の障害傾向が高いこと、更に総じて妹は姉より容姿の自己評価が低いとともに、比較や規範内面化の身体像への否定的影響が強いことが示されている。

既に見たとおり、メディア上のモデルとの接触が及ぼす身体に関する否定的影響を実験的に検討した例は多いが、その中には文化規範の内面化が調整変数として作用していることを示した例もある。Cattarin, Thompson, Thomas, & Williams (2000) は、痩身あるいは通常体重の女性モデルのいずれかを掲載した広告を呈示した後に、感情と身体像に関する諸測定を行う、女子大学生を参加者とする実験を実施している。痩身モデルを呈示された場合に不快な感情が惹起され、身体不満足が増大するという他の知見と一致する結果が得られたのに加えて、この傾向は主に文化的規範を内面化している者に顕著であることが示されている。

Dittmar & Howard (2004) はCattarin et al. (2000) の実験手続き上の問題点を改善し、かつ、この問題は青年期に限定されず成人女性にも及ぶかを検討すべく、女性会社従業員（平均年齢32.7歳）を参加者とした、類似の実験を行っている。その結果、痩身モデルによって身体像に関する不安が増大する傾向は、規範を内面化している者ほど著しいこと、規範を内面化している上に日常的にモデルとの比較を行っている者は、通常体重のモデルによっても不安が増大することが確認されている。

文化による痩身規範の差異：ここまで概観してきた知見では、メディア上のモデルは白人女性であり、対象者も基本的に欧米の白人女性である。したがって、痩身を美とし理想とする考え方はあくまでも欧米の白人が共有する文化的規範であり、それ以外の文化ではそのような規範は作用していない可能性も大きい。

一例として、ヨーロッパ系とアフリカ系を含む女子高校生を対象としたBotta (1999) の調査では、痩身モデルが頻出するテレビドラマの視聴時間、モデルとの社会的比較の程度、メディアに対する疑問や批判的態度が、痩身を理想とする程度と身体像障害に及ぼす影響が問題とされている。ヨーロッパ系生徒での結果は、社会的比較の頻度が高い者ほど、痩身理想が高く痩せようとする動機が強く、また、身体不満足や過食傾向が高いことが示されている。同時に、痩身理想が低い場合はドラマを批判的態度で聴取すれば過食傾向が低減するが、痩身理想が高いとそうならないなど、痩身を美として理想化している程度が、メディア接触と身体像混乱の關係に影響していることも認められている。一方、アフリカ系生徒では社会的比較・痩身理想と身体不満足の関係が白人生徒は異なっており、痩身を美とする規範は文化により異なる可能性が示唆されている。

Milkie (1999) は、面接を主とした質的分析を通じて、メディア上の痩身モデルとの比較による否定的影響の程度やその過程が、ヨーロッパ系女子高校生とアフリカ系生徒では異なることを示している。思春期の女子対象の雑誌に登場するモデルが非現実的であるとする点で双

方の生徒に差はないが、ヨーロッパ系生徒は自分以外の一般的な他者は瘦身規範を受容していると認知する傾向が大きく、それ故にモデルとの上方比較を行い身体像の自己評価が低下するのに対して、アフリカ系生徒にはそのような一般的他者の認知はなく、モデルを比較の相手とはしていないことが示されている。即ち、社会的比較の作用は、準拠集団の認知あるいは反映的評価の過程により異なることが指摘されている。

ヨーロッパ系、ヒスパニック系、アフリカ系の女子大学生を対象として、Poran (2002) は実験と自由記述の分析を併用した研究を行っている。身体像についての自己評価はアフリカ系学生が他の2系の学生より高いが、それに付随して以下のような傾向が認められている。即ち、集合自尊心、とりわけ自分の集団成員性への高い評価がアフリカ系とヒスパニック系学生に認められる一方、集合自尊心は身体像の自己評価と正相関している。また、女性の容姿についての自由記述で、一般に美とされている基準はヨーロッパ文化のそれであることに言及した頻度は、アフリカ系学生で最も高くヨーロッパ系学生が最も低い。更に、自分の所属する成員との間で下方比較を行う傾向は、ヨーロッパ系が最高でアフリカ系が最低であった。これらの結果は、アフリカ系女性はアフリカ系集団への所属を強く意識するとともに、メディアで顕著な瘦身理想を規範として受容しておらず、そのために身体像自己評価の低下は生じていないのに対して、ヨーロッパ系学生は自己の所属する文化規範を必ずしも意識化することなく受け入れ、身体像自己評価を防止する下方比較を行っていることを示唆している。

Evans & McConnell (2003) も、ヨーロッパ系、アジア系、アフリカ系の女子大学生が参加した実験において、アフリカ系学生のみはヨーロッパ系美人の写真との接触後も自尊心の低下が見られない、また、身体像自己評価がヨーロッパ系、アジア系より有意に高い、各系の美人の写真の評定で他の2系では差が見られないがアフリカ系学生は自系美人への評価が最も高い、などの結果を得ている。これは、アフリカ系学生はヨーロッパ系美人を社会的比較の相手とはしていないことを示唆する。一方、アメリカ社会ではアフリカ系同様少数派であるにも拘わらず、アジア系学生はヨーロッパ系学生と同様にヨーロッパ系美人の写真を見た後には自己評価が低下した。アジア系学生はヨーロッパ系中心のアメリカ文化規範に同調しようとする傾向がアフリカ系学生よりも強いために、このような結果がもたらされたと、Evansらは結論づけている。

更に、Makkar & Strube (1995) はアフリカ系女子大学生を参加者とした実験を通じ、アフリカ文化への同一化の程度が、ヨーロッパ系美人への接触の効果を調整していることを明らかにしている。即ち、ヨーロッパ系美人の魅力度評定を行なった後に自分自身の魅力度を評定した際、一般に自分自身をモデルよりも高く評価する傾向が見られたが、アフリカ文化への同一化が高い者はそれが顕著であるのに対し、同一化の低い者ではその傾向は微少であった。一方、アフリカ系美人を呈示された場合には、同一化の程度は自他の魅力度の評価に影響を及ぼして

いない。アフリカ女性、とりわけアフリカ文化への同一化が高い者は、ヨーロッパ文化での文化規範を受け入れている点で、上述の諸知見と軌を一にしている。

男子青年の場合：以上の諸知見の殆どは女子青年を対象としたものであり、社会的比較と摂食障害との関係が男子では認められないことは、既に見た Heinberg & Thompson (1992a) にも示されている。しかしながら、男性の身体についても一定の規範が存在する以上、身体の社会的比較に関わる諸問題は男子青年にも生ずることが考えられる。例えば、青年期に身体像への関心と社会的比較が増大することに関して、男子中学生を対象とした Smolak & Stein (2006) の知見では、男性性への願望は比較頻度の高い生徒に強いこと、また、男性性に関するメディアへの接触頻度の多い生徒でも強いことが示されている。また、社会的比較による身体像の自己評価の低下が男子にも見られることを示す知見 (Thornton & Moore, 1993; Faith et al., 1997) は既に述べた。

メディア上での過度に理想的なモデルが、身体像の自己評価に否定的影響を及ぼすのは、女子のみならず男子青年でも同様であることを、Hobza, Walker, Yakushko, & Peugh (2007) による実験は示している。雑誌広告を呈示された後に身体についての自己評価を参加者に求めるが、その際、強壮な男性モデルを含む広告を呈示される群では、財力豊かな男性モデル広告あるいは商品広告を呈示される群よりも、身体的魅力等の自己評価が有意に低いという結果が得られている。

Hargreaves & Tiggemann (2009) の男子大学生を参加者とする実験でも、強壮な男性モデル、あるいは、特に強壮ではない男性モデルが登場するテレビコマーシャルを聴取した後に、容姿の自己評価を求めている。その結果、強壮なモデルを聴取した群では、非強壮群に比べて、自分の身体の男性性についての自己評価が有意に低かったが、体重についての不満に差はなかった。更に、強壮なモデルは自己との社会的比較を導き、更に比較によって男性性の自己評価が低下するという、社会的比較の媒介効果が確認されたとともに、身体像の評価が元来低い者、あるいは、強壮な身体を得るべく種々投資を行っている者に、上述の傾向が著しいことも示されている。

更に、Smolak, Murnen, & Thompson (2005) は、小学6年生から中学2年生の男児を対象とした調査で、社会的比較の頻度の高い生徒は、強壮な身体特性を獲得するための身体鍛錬や食品・薬物摂取の傾向が高いこと、及び、男性性を強調するメディア・友人・両親がそのような傾向を促進するとともに、社会的比較がそれを調整していることを示している。即ち、男子の場合は女子のような摂食障害は見られないものの、薬物摂取など身体を巡る否定的行動がもたらされることが認められるのである。

総括：青年期の身体像、就中、摂食障害の問題は、医学とも関連する実践的色彩の濃い領域であり、したがって、社会心理学的に見ると方法的な問題を含む研究も殊に初期の研究を中心に散見される。社会的比較の効果や文化的規範の内面化の影響について、諸知見の間に相違も見られることは、これまで概観したとおりであるが、その背景の1つに方法的不備もあると思われる。

初期の研究では、独立変数としての比較相手の実験的操作あるいは比較頻度の調査と、従属変数としての身体像自己評価あるいは摂食障害傾向の測定が行われているのみで、その間に社会的比較が介在することの検討、あるいは比較の過程が如何なるものであるかの吟味を欠いているものが大半であるのに対し、最近の研究では社会的比較の媒介過程を重視する傾向が見られる。特に、軌近社会的比較研究の研究成果を取り入れ、比較における対比と同化、及び、それぞれの効果をもたらす要因を視野に入れた研究が増加していることは、その一例であろう。

全体を総合すれば、(1)上方比較によって身体像の低下がもたらされ、それが特に甚だしい場合は摂食障害などの身体像の障害接触にまで及ぶこと、(2)メディア上の過度に痩身のモデルが上方比較の相手になりがちなこと、(3)上方比較は対比効果による否定的な効果だけでなく、同化効果による肯定的結果をもたらすこともあり得る、の諸点を示唆している知見が多いと言える。

他方、メディア上のモデルとその効果は社会・文化的規範の影響が強いことも明らかにされている一方、社会的比較が上方、下方のいずれの方向に向かうか、及び、そこで同化と対比のいずれが顕著になるかに関しても、文化的影響が作用している（高田，2011）。文化的規範の内面化の効果を扱った諸知見も概観したが、それらの中には矛盾する点も含まれ、青年期の身体像を巡る社会的比較の影響における文化的要因は必ずしも明確にはされていない。今後の更なる検討が必要であろう。

Ⅲ. 成人期の結婚生活・職業生活と社会的比較

自己高揚的な結婚評価：Erikson（1959）の漸成説では自我同一性の達成が青年期の発達課題であるとされるが、同一性の達成においては職業の選択が重要な役割を果たしていることが指摘されている（Marcia, 1966）。更に、青年期に続く若年成人期・成人期での発達課題は、親密さの形成と生殖性、即ち異性との関係の構築と子育てである、とEriksonは断じている。この見解に従うなら、成人期の人々にとって結婚生活と職業生活は大きな意味を持つと言えるが、そこにおける社会的比較がどのように作用しているかを検討した幾つかの研究がある。

結婚生活での社会的比較の作用に関する実証的検討の嚆矢は Titus（1980）であると思われる。30組の夫婦（平均年齢：夫38歳、妻36歳）を対象とした面接調査において、夫婦各々が友人と

の会話の中で互いの結婚生活について話した内容の質的分析を通じて、以下が示されている。即ち、子育てや役割分担を巡る夫婦間の問題が生じやすい、若年あるいは専門職共働きの夫婦に友人との比較が多いこと、積極的に比較に言及した者は自分の結婚生活を友人より肯定的に捉えている傾向があること、要求水準として自分よりも恵まれた他者と比較する場合や、自分の状態を判断する枠組みとして比較が言及される場合が目だつこと、などである。

Titus (1980) の知見に見られた、自分の結婚生活を他者より上であると認知する傾向は、自己高揚的な方向で比較を行ったり比較結果を解釈するという、社会的比較研究における頑健な知見と合致するものである。斯かる方向から、Buunk & van der Eijnden (1997) はオランダの成人男女 (平均28.6歳) に対する調査を行っている。それによれば、大多数の他者に比べて自分の夫婦関係は良好だとする者が多いこと、同時に夫婦関係が良好な他者もまた多いと認知する傾向が見られること、それらの傾向は結婚生活に満足している者ほど著しいこと、が確認されている。これは自己高揚的に自分の夫婦関係を認知する方策として、対比的な優越性の認識と同時に、同化的な虚偽の合意 (false consensus) の認識があることを示唆している。なお、同様な傾向がネットを通じた大規模な調査によっても確認されている。

新婚夫婦の社会的比較の様態を検討した Frye & Karney (2002) の知見でも、自己高揚的傾向が示されている。結婚後6ヶ月から2年以内の夫婦82組 (平均夫25.1歳、妻23.7歳) を対象とした縦断調査と面接を通じて、夫婦間に存在する問題は他の夫婦に比べて深刻ではないと一般には評価されているが、問題が深刻である者ほど他者より状態がよいとは評価しておらず、これは下方比較説とは一致しない結果である。同じく、深刻な問題を抱えている者ほど、問題は将来改善されると評価していたが、6ヶ月後の再調査の結果では改善は示されていなかった。即ち、社会的比較ではなく、将来との継時的比較によって自己高揚が行われていると言え、現実的制約の少ない継時的比較による自己高揚は、社会的比較よりも容易であるとする Wilson & Ross (2000) の主張が裏づけられている。

結婚満足度と社会的比較：結婚生活に対する満足度と社会的比較との関係を扱った研究として、Buunk & Van Yperen (1991) の知見がある。彼等は、結婚生活の中での社会的比較を、自分と配偶者との比較 (関係的比較: relational comparison) と、自分と同性の他者との比較 (準拠的比較: referential comparison) とに分け、Adams (1965) の衡平説 (equity theory) を援用し、結婚生活での投入量と結果の比率を比較するとしている。その比率には自分が有利な場合、衡平な場合、自分が不利な場合とがあるが、準拠的比較では自分が有利なほど結婚満足度は高いのに対して、関係的比較では衡平な場合が最も満足度が高く、不利な場合が最も低いこと、公平に敏感な特性も持つ者、とりわけ女性の場合、関係的比較で見られた上述の傾向が顕著であることなどを、オランダの既婚男女 (平均41.0歳) を対象とした調査によって示している。

諸井 (1996) は、日本人既婚女性 (平均34.1歳) を対象にBuunk & Van Yperen (1991) の追試研究を行っている。その結果、伝統的な男女の性役割観を持っている女性では、関係の比較も準拠的比較も結婚満足度に全く影響していないこと、男女平等の性役割観を持つ女性の場合は、夫も平等的性役割観を持つケースでは関係の比較が影響しているもののむしろ不衡平な場合に結婚満足度が高い面 (子育て) があること、夫が伝統的性役割観を持つケースでは準拠的比較が影響しており、結婚満足度は自分が有利な場合に高い面 (子育て) もある一方で、自分が不利な場合に高い面 (家事) もあること、などが示されている。これはBuunkらのオランダでの結果とはかなり異なり、結婚満足度に対する文化的要因の作用を示唆していると言える。

一方、結婚満足度と社会的比較の関係を検討する際、上方比較と下方比較がもたらす感情的効果、即ち、特に自己脅威状況やストレス状態において、対比効果によれば下方比較は肯定的感情、上方比較は否定的感情をもたらす、同化効果では下方比較は否定的感情、上方比較は肯定的感情を引き起こすが、その調整要因は何かという最近の社会的比較研究の理論的枠組みに沿って、結婚満足度を調整変数と位置づけ、主にオランダ人を対象として検討した調査や実験が、Buunkを中心として多く行われている。

その最初の例は、Buunk, Collins, Taylor, VanYperen, & Dakof (1990) の研究であり、結婚満足度が低い状況は、自己脅威やストレスをもたらす状況として、癌に罹患した場合と同列に扱われている。成人男女 (平均40.6歳) を対象とした調査で、結婚生活について、上方比較による肯定的感情あるいは否定的感情、下方比較による肯定的感情あるいは否定的感情のそれぞれを経験する頻度の回答が求められている。それによれば、上方にせよ下方にせよ肯定的感情をもたらす比較の頻度は否定的感情をもたらす比較の頻度より高いが、その中でも肯定的感情をもたらす下方比較の頻度が最高で、肯定的感情をもたらす上方比較がそれに次ぎ、否定的感情を引き起こす下方比較が最低であるという、癌患者の場合と同一の結果が示されている。更に、結婚満足度の低い者は、上方比較でも下方比較でも肯定的感情が引き起こされることが少なく、下方比較により肯定的感情がもたらされることが多いのに対し、満足度の高い者はその逆であることが報告されている。

この問題を実験的に検討したものとして、Buunk (2006) の知見がある。上方比較が肯定的感情をもたらすのは、比較相手との同一視が生じた場合であり、それは結婚満足度が高く、かつ、比較相手が努力した結果として結婚生活を送っている、即ち、自分にもその状態の到達可能性 (attainability : Lockwood & Kunda, 1997) があると認知された時に生じる、という仮説の下に、既婚成人男女 (平均年齢43.0歳) を参加者とした実験が行われている。架空の理想的な夫婦の面接記録を閲読せしめ、読後の感情と架空人物への同一視の程度を測定する手続きで、その際、架空夫婦が費やした努力に関し、多大あるいは微小とされる条件が操作される。その結果、仮説は概ね支持されたとともに、結婚満足度と比較相手の努力の認知が同一視を引き起

こし、同一視が肯定的感情をもたらすという同一視の媒介効果も示されている。更に、社会的比較志向の高い者に上述の傾向が著しいことも認められている。

一方、Buunk & Ybema (2003) は、比較の結果として如何なる感情と評価がもたらされるかは各々異なった次元で生じ、上方比較では自動的過程として肯定的感情(同化)が生じるが、認知的過程では自己評価は低下する(対比)一方、下方比較ではその逆で、否定的感情(同化)と自己評価の上昇(対比)がもたらされ、その過程に影響する要因として、結婚満足度と、比較相手の努力の程度がある、と仮説している。既婚女性(平均年齢50.5歳)を対象としたこの実験でも、架空の面接記録を通じて、上方比較と下方比較、比較相手の努力の多少が操作されている。結果として、比較の対比効果は感情面、対比効果は評価面で生じるという仮説は支持されたが、相手の努力に関する仮説は、主に実験操作の方法的不備により支持されていない。また、結婚満足度の高い者は、上方かつ努力を費やした相手と同一視する傾向が見られるとともに、その同一視が肯定的感情を惹起していることも示されている。

他方、不明確な感情状態の下では、他者との比較を通じて不明確さを低減するために親和行動が生じる、というSchachter (1959) の古典的実験結果に依拠し、Buunk, Van Yperen, Taylor, & Collins (1991) は、成人男女(40.7歳)を対象とし、親和行動の生起に及ぼす結婚満足度と、結婚生活の今後についての不明確さの影響を検討する調査を行っている。結婚満足度が低いほど、及び、不明確さが大きいほど、親和傾向が強かったが、これは社会的比較の自己評価機能の作用と考えられる。また、満足度が低いほど、結婚生活に満足している者との親和傾向、即ち上方比較の傾向が強くと、これは比較の自己評価あるいは自己向上の機能の発露と言え、結婚に不満足な状態はストレスを強く感じているとすれば、Wills (1981) の下方比較説に合致しないものである。更に、そのような傾向は対人志向性の高い者に顕著であることも示されている。

職場ストレスと社会的比較：結婚満足度と社会的比較に関する研究と同様に、自己脅威状況やストレス状態における上方比較と下方比較がもたらす感情的効果についての理論的枠組みを、職場でのストレス状況、即ち、バーンアウトの問題や失業問題に援用した研究もまた、Buunkらにより行われている。Buunk, Schauffeel, & Ybema (1994) は、オランダの男女看護師(平均31.1歳)に対する調査を通じて、バーンアウトの症候中、感情の枯渇、あるいは職務上の相手に対する否定的態度が著しいほど、また、職務遂行上の不明確さを多く認知しているほど、同職者の感情や反応を知りたいという、社会的比較への動機づけが高いという結果を得ている。同時に、全体としては、とりわけ特性自尊心の高い者では、比較の内容(職務経験と能力)と比較の様態(情報探索と親和行動)の双方で上方比較の傾向が顕著であるが、バーンアウトの1症候である自己の職務能力への否定的態度が顕著である者は下方比較が目だつという、下方比較説(Wills, 1981)に沿った結果が報告されている。

Buunk, Ybema, Van der Zee, Schaufeli, & Gibbons (2001) によるオランダの男女看護師 (平均年齢31.0歳) を対象とした調査、および上述の Buunk et al. (1994) の調査の再分析は、前述した癌患者と既婚夫婦に対する調査 (Buunk et al., 1990) を、職場ストレス問題に援用したものである。再分析結果と新規の調査の双方で、上方比較による肯定的感情あるいは否定的感情、下方比較による肯定的感情あるいは否定的感情の各々を体験する頻度では、肯定的感情は下方比較よりも上方比較、否定的感情は上方比較よりも下方比較によってもたらされるという結果が得られている。これは、肯定的感情は上方比較と下方比較の双方で同程度に引き起こされる、という Buunk et al. (1990) の結果と異なるが、看護師という職務の特殊性が反映された結果であると Buunk らはしている。同時に、バーンアウトの症候を強く示している者は、下方比較で否定的感情よりも肯定的感情を、上方比較では肯定的感情より否定的感情を、それぞれ多く体験するという、これも下方比較説に沿った結果が得られている。

結婚満足度と社会的比較に関する Buunk & Ybema (2003) あるいは Buunk (2006) と同様の手法を用いて、比較方向と体験される感情の問題を実験的に検討しているのが、Buunk, Ybema, Gibbons, & Ipenburg (2001) の研究である。オランダの医療刑務所の男女心理士 (平均39.0歳) を対象として、職務成績の優れたあるいは劣った同僚の架空の面接記録を通じて上方比較と下方比較が操作されたこの実験では、一般に上方比較では肯定的感情が体験され比較相手との同一視が引き起こされるが、下方比較では否定的感情がもたらされ同一視も生じないことが示されている。但し、バーンアウトの症候を強く示している者は例外で、上方比較では肯定的感情と同一視の程度が低く、下方比較では否定的感情を強く感じるとともに同一視の程度も高いこと、更に下方比較での傾向は社会的比較志向の高い者で一層顕著であることも認められている。これは、これまでに述べた知見とは異なり、下方比較説に背馳する結果である。

Carmona, Buunk, Peiro, Rodriguez, & Bravo (2006) はスペインの男女小・中学校教師 (37～55歳が大半) を対象とした調査を行っている。ここでは、社会的比較の方向と様態、即ち、上方及び下方比較が同化的か対比的かとバーンアウトとの関係に加えて、ストレスへの対処方略も取り上げ、相互の関係が横断的のみならず縦断的に検討されている。その結果、下方比較による同化と上方比較での対比、及び、課題解決的なストレス対処をせず情緒的な対処をする傾向が、バーンアウトの症候をもたらししていること、また、上方比較での同化と下方比較での対比は課題解決的なストレス対処、下方比較での同化と上方比較での対比は情緒的なストレス対処と相関していることが示されている。

職業に関連したストレス状況として失業の問題を扱っている Ybema, Buunk, & Heesink (1996) の実験的研究も同様の問題意識に立つものであり、既に見た架空面接記録の提示により上方比較と下方比較を実験に操作した研究 (Buunk et al., 2001; Buunk & Ybema, 2003; Buunk, 2006) の先魁である。人員削減により失業したオランダの男女企業従業員 (平均40.0歳) を対

象とした実験の結果、失業に伴うストレスへの対処に関する上方比較は肯定的感情、下方比較は否定的感情をもたらすこと、ストレスが大きいほど下方比較に伴う否定的感情は上昇し上方比較による肯定的感情は低下するが、その過程を比較相手への同一視が媒介するという、下方比較説に合致しない知見が得られている。

職場のストレスの問題に直接関連はしていないが、Buunk, Van der Zee, & Van Yperen (2001) による研究も、これまでに触れた一連の研究と問題意識を共有するものである。オランダの男女看護師（平均32.9歳）を参加者としたこの実験も、架空面接記録による上方比較と下方比較の実験操作を用いている。その結果、一般に下方比較より上方比較で肯定的感情と比較相手との同一視がもたらされるが否定的感情は引き起こされ難いという、これまでに見た諸研究と同様な知見に加え、神経症傾向の強い者ではむしろその逆の傾向が見られ上方比較に対して否定的に反応するが、社会的比較志向の強い者は下方比較に否定的に反応することが示されている。

同じく Buunk, Zurrigana, Peiro, Nauta, & Gosalvez (2005) は、上方比較と下方比較の感情的効果に及ぼす職場雰囲気と社会的比較志向の影響を、スペイン医療センターの男女の医師（平均41.6歳）について調査している。その結果上方比較により肯定的感情、下方比較により否定的感情がもたらされる同化効果は、協同的な職場雰囲気を認知している者で顕著である一方、社会的比較志向の高い者には、上方比較による否定的感情と下方比較による肯定的感情という対比効果が見られたが、上方比較に関する結果は上記の Buunk, Van der Zee, & Van Yperen (2001) による知見と矛盾している。なお、上方比較の頻度は下方比較より高く、肯定的感情は下方比較よりも上方比較、否定的感情は上方比較よりも下方比較によってもたらされるという Buunk et al. (2001) の知見は再現されている。

一方、Michinov (2005) はフランスの男女税関職員（平均32.9歳）と警官（平均34.2歳）を対象者とした調査で、職場環境や俸給などについての上方比較は職務に関する統制感を増大させ、それが職務満足を上昇させるとともに、頭痛などの健康愁訴やバーンアウト症候のうち感情枯渇を低減させる、という関係を税関職員について見出だしている。警官についてもほぼ同様の結果が得られているが、社会的比較の健康愁訴への影響は認められていない。この相違は、職務での自己脅威が警官は税関職員より高いことに由来すると、Michinovは述べている。

職場の諸問題と社会的比較：ここまで考察してきた、社会的比較研究の枠組みの中で職場におけるストレスの問題を扱った Buunk らによる一連の研究の他に、職場で生じる様々な問題と社会的比較との関係を検討した研究が幾つか見られる。

Geurts, Buunk, & Schaufeli (1994) は、意図的欠勤と社会的比較との関係をオランダの2つの職場の男性工場労働者（平均年齢35.1及び36.7歳）を対象に調査している。職場環境や賃金などについての他者と比較した不衡平感をもたらす憤懣を媒介として、意図的欠勤が生じると

いう衡平説に基づくモデルよりも、欠勤を許容するか否かについての職場の集団規範との比較によって、欠勤への個人的規範が形成される結果、それが欠勤率を決定するという、社会的比較の情動的影響に基づくモデルの適合性が高いことが、共分散構造分析を通じて示されている。

Thau, Aquino, & Wittek (2007) は、オランダの老人介護施設従業員（大半は女性で平均年齢 40.6 歳）の職場での反社会的傾向を問題とした調査を行っている。上司の評価により仮病、抗命などの反社会的行為が目だつとされた従業員のうち、社会的比較志向の強い者では、上司との相互作用における不衡平感が高くそれが反社会的傾向をもたらしている傾向が認められた。一方、進行中の組織変更に関する手続き的衡平感に関してはそのような傾向が認められなかったことから、社会的比較志向の強い者は対人関係での不衡平に敏感である可能性が指摘されている。

Williams & Geller (2000) は、清涼飲料水工場の男性労働者に対する労働災害防止のための講義と、実習後の労働者の職場での行動を観察しその結果をフィードバックした場合の、防災講義の成果を現場実験を通じて検討している。フィードバックは、特定の安全行動の生起率に関する特殊的フィードバックと、全安全行動の生起率を一括して伝える全般的フィードバック、及び、それぞれのフィードバックの中で、同一職場の他班と比べた情報を含む場合と含まない場合とがあったが、比較情報がある場合は無い場合よりも安全な行動が多く見られた一方、特殊のと全般的のフィードバックで効果に差はなかった。社会的比較情報の効果は、他の班の成績を凌ごうとする向上性の圧力の故である、と Williams らはしている。

職場の同僚に対する情報伝達と上方・下方比較の関係について、Fischer, Kastenmuller, Frey, & Peus (2009) はドイツの男女労働者（平均 26.9 歳）を参加者とした場面想定法を用いた実験を通じて検討している。俸給、昇進、成績などの点で自分より優れた同僚、即ち上方比較の相手には、下方比較の相手に対してよりも適切な情報を伝達しない傾向があり、比較相手に対する嫉妬がそれを媒介していること、また、上方比較の相手に低質の情報を大量に伝えることも生じるため、伝達する情報の量については上方比較と下方比較の相手で差異はないことが示されている。

最後に Meeus, Dekovic, & Iedema (1997) は、失業が自我同一性達成に及ぼす影響における社会的比較の役割を、オランダの青年と若年成人の失業者と就業者（18～25 歳）を対象に調査している。自我同一性地位 (Marcia, 1966) に基づくと、自我同一性達成には幾つかの側面での傾倒 (commitment) と探索 (exploration) を要すると考えられるが、職業の側面での傾倒の程度は、就業者が失業者より高いのに対し、他者との関係性についての傾倒では、失業者は就業者より高いという結果が認められた。これは、自分に有利な側面で社会的比較を行う傾向があり、そのため就業者は職業、失業者は関係性の側面での自己評価が高いことが背景にある、と Meeus らは推定している。

総括：ここで概観した研究は、その基本的方向の点で2つに大別される。即ち、結婚生活に代表される親密な異性関係に関する諸研究、及び職場ストレスを扱った一連の研究に代表される、社会的比較研究の一環として行われた大多数の研究群と、職場の諸問題を扱った一部の研究群である。前者については、本稿では触れなかった青年期の親密な関係の検討も含め、社会的比較における自己高揚機能の発現機制、あるいは、上方比較と下方比較における対比効果と同化効果を調整する変数の検討など、最近の社会的比較研究の成果が取り入れられた知見が報告されている。それに対し後者においては、青年期の摂食障害問題と同様、実践的色彩が強く、方法論的問題や社会的比較の位置づけなどに問題が残されているように思われる。

前者の研究群からの知見の大凡の傾向は、(1)結婚満足度や夫婦関係の評価においても自己高揚的な傾向が一般的に見られる、(2)上方比較でも下方比較でも、同化と対比のいずれが生じるかにより、肯定的あるいは否定的な心理的效果が生じる、(3)結婚不満足や職場でのバーンアウトのような自己脅威あるいはストレス状態で、上記いずれの心理效果が生じるかは、研究間で必ずしも一致していない、(4)肯定的あるいは否定的心理效果の生起を調整する要因としての社会的比較志向の影響についても、研究によって異なっている、と言えるであろう。

衡平説(Adams, 1965)の立場から検討されている例が多いため、ここでは一部を除き含めなかった、職場における賃金や処遇に関する比較を扱った研究でも、知見間に整合性があるとは言いがたい。これらは畢竟、環境要因と個人特性の双方における成人の変動性の大きさに由来している部分が多いためと考えられよう。したがって、成人期に顕現する諸問題について社会的比較の観点から何らかの結論を下すには、問題領域、対象者、分析視角などのそれぞれについて、更に多様な資料を集積する必要がある。就中、ここで概観した諸研究に限っても、欧米文化の中とはいえ対象者にかなりの偏りが見られる。況んや欧米以外の文化における研究例が極めて乏しいことは大きな問題であるが、これについては後に再度触れることとする。

IV. 老人期の心身の健康と社会的比較

老人期の比較の様態：Suls & Mullen (1982)の生涯発達モデルでは、心身機能の衰えと社会的接触の減少により、老人期では過去の自己像との継時的比較が主要な自己評価の基準となり、社会的比較の役割は相対的に低下するとされる。しかし、それを支持する実証的知見は僅かにSuls (1986)に止まる。社交や仕事など、日常生活の諸側面の自己評価を行った後、その評価の基準を、同年齢他者との比較、年齢の異なる他者との比較、自分自身の過去との継時的比較の各々から選択する形式の調査で、継時的比較の選択は62歳から75歳の老人層では他の年齢層(16歳～50歳)に比して高いことが示されている。但し、老人層でも最も多く選択されている基

準は同年齢他者との社会的比較である。

それに対し、社会的接触の減少を前提とした Suls & Mullen (1982) のモデルとは異なり、老人期においても社会的比較を通じた自己評価、就中、自己高揚的な評価が優勢であることを、半構造化面接を用いた質的研究を通じ、自由発話の内容分析によって示している研究が幾つかある。Rickabaugh & Tomlinson-Keasey (1997) は、活動性、経済状態、身体的健康に関する老人（平均72.4歳、大半は女性）の自発的言及で、継時的比較より社会的比較が圧倒的に多く、更に社会的比較の中では上方比較より下方比較が顕著で、継時的比較でも下方比較あるいは変化はないとする言及が多いことを示している。Gorawara-Bhat, Huang & Chin (2008) もまた、老人糖尿病患者（平均74.3歳）への面接において、食事制限や日常生活の自己管理の動機づけとして同年齢他者との社会的比較を上げる者が多いこと、而してその比較は大半が下方比較であること、下方比較は慢性疾病生活への適応等に好ましい影響を及ぼしていることを見出している。

更に、Sherrard (1994) はイギリス人老人（平均71.8歳）を対象とした面接を通じて、加齢、長寿、活動性、安全、経済問題等の直面する問題について下方比較が多く言及され、それは肯定的結果をもたらすとしている。また、他者との上方比較や若年時との継時的比較が言及された場合には、合理化や補償的解釈が伴われることも見出だされている。但し、そのような傾向は社会階層により異なり、労働者階級に属する老人では見られない。貧困や被差別という現実が、下方比較や合理化による主観的幸福感の獲得を阻止していると、Sherrard は断じている。

他方、Heckhausen & Krueger (1993) による知見は、加齢に伴う様々な特性の獲得や喪失、またその統制可能性について、社会的比較がどのような動機に基づいているかを、ドイツの若年成人（平均28.8歳）、中年成人（平均47.5歳）、老人（平均68.6歳）を対象に検討したものである。望ましい特性と望ましくない特性について、今後それらを獲得あるいは喪失する予想、自分自身、および、多くの他者について、それら特性の獲得や喪失を統制できる程度、それら特性を具備している程度、などが調査された。その結果、自分自身や多くの他者が望ましい特性を喪失する予想は老人期で急激に高まるにも拘わらず、統制できる程度や具備している程度は、望ましい特性は他者より自分、望ましくない特性は自分より他者が高いとする傾向、即ち自己高揚傾向は、若年成人、中年成人に比して老人期に甚だしいことが報告されている。

以上概観した如く、Suls & Mullen (1982) のモデルが指摘する老人期における継時的比較の優勢を積極的に支持する知見は皆無と言ってよい。むしろその逆に、継時的比較は青年期に多く見られるという知見がある一方 (Wilson & Ross, 2000)、老人期について現存する知見は全て、社会的比較、就中、自己高揚機能を帯びた比較が老人期に顕著であることを示している。

社会的比較の効果：老人の健康状態や主観的幸福感に対しては、Suls & Mullen (1982) のモ

デルが示唆する継時的比較よりも社会的比較、それも自己より劣った他者との下方比較が影響していることは、前述した Sherrard (1994) などの質的研究においても示されているが、面接・質問紙調査や実験を通じて社会的比較と継時的比較の効果を検討した研究としては、以下が挙げられる。

Suls, Marco & Tobin (1991) は、男女老人（平均79.5歳）の健康状態自己評価に対する、継時的比較、社会的比較、他者からの直接的フィードバックの影響を調べている。それによれば、健康状態の評価基準としては、過去との継時的比較、直接的フィードバック、老人以外の集団との比較が多く用いられている一方、他集団との下方比較と同等比較、及び他の個人との下方比較は健康状態の自己評価を高める方向で作用しているが、過去との継時的比較と自己評価との関係は認められないことが示されている。

Robinson-Whelen & Kiecolt-Glaser (1997) の知見もまた、老人（平均70.0歳、大半は女性）の健康状態、収入、記憶力に関する自己評価と継時的比較の関係は認められない一方、下方比較との関連があることを示している。即ち、自己を他者より上に位置づけて評価する形での下方比較は自己評価との正の相関を示したのに対し、5年前の自分自身との継時的比較では相関はない。更に、健康と収入の自己評価が高いほど生活満足度は高い結果が示されたのに対して、下方比較の情報源である記憶についての自己評価は生活満足度への影響が認められないことから、Suls & Mullen (1982) のモデルは非であると Robinson-Whelenらは断じている。

自己評価の基準あるいは源泉として、社会的比較や継時的比較の他にも、他者の視点を取り入れる反映的評価や、他者との同一視などがある。それらの諸方途に伍しての社会的比較の効果を検討した知見が幾つかある。例えば、Ryff & Essex (1992) は、様々な事情で転居した女性老人（平均74.9歳）に対し、転居後の健康、人間関係、経済などについての認知と、それらが社会的比較、反映的評価、自己知覚のいずれによって決定されているかが、人生の意義や他者との関係、自己受容などの主観的幸福感に及ぼす影響を検討している。その結果、総じて自己の状態を他者より上と位置づける比較的評価、即ち下方比較や、他者からの好意的反映的評価は、主観的幸福感を高めることが示されている。

また、Frieswijk, Buunk, Steverink & Slaets (2004) は、生活満足度に対する社会的比較と同一視の効果を実験的に検討している。オランダの男女老人（平均約74.3歳）を対象としたこの研究では、極めて健康な（上方比較）あるいは不健康な（下方比較）他の老人の架空面接記録を呈示した後、生活満足度が測定されている。後者の面接記録を呈示された群の生活満足度は高く下方比較の一般的効果が示されたと同時に、下方比較の対象人物との同一視の程度が低い場合には生活満足度が殊に高まる一方、同一視の程度が高い場合には低下する傾向が、要介護度の高い老人の場合には認められている。

効果を調整する変数：このように下方比較が老人の健康の自己評価や、生活満足感、主観的幸福感に対し、総じて肯定的な効果をもたらすことを示す知見がある一方、そのような効果を調整する変数があることを示唆する研究もある。Fry & Debats (2003) は、配偶者を失ったカナダの男女老人 (65~87歳) に、身体機能、家族関係、経済状態などの領域で自己評価する際に、上方比較、下方比較、同等比較する頻度が、健康に関連した生活の質、生活満足感、楽観的態度に及ぼす影響を検討している。その結果、全体に上方比較と下方比較は同等比較より多く見られた。而して、男性の場合は総じて下方比較は肯定的結果をもたらすのに対して、女性では楽観的態度を除いて上方比較が肯定的結果を惹起しており、下方比較と上方比較の影響を性別が調整している。

加齢に伴う統制感の喪失に対しては、その防止や回復を図る直接的な対処である1次的統制と、喪失を受け入れた上での心理的な対処である2次的統制の区分が提唱されている (Heckhausen & Schulz, 1995)。Bailis, Chipperfield & Perry (2005) は、1次的統制感の有無が下方比較の効果を調整することを示している。長期追跡調査を実施中の男女老人 (平均80.0歳) に対し、健康状態、活動水準などの同年齢他者との比較的評価、1次的統制感の程度などを調査し、1次的統制感の低い老人では下方比較が入院率や長寿率に肯定的影響を及ぼしている一方、統制感の高い老人には下方比較の効果は見られないことが報告されている。即ち、老人の1次的統制努力に限界があるのは必然である以上、2次的統制努力として楽観的な下方比較が効奏することが示唆される。

Cheng, Fung & Chan (2008) は香港の男女老人 (平均73.1歳) を対象として、下方比較が生活満足感と抑鬱傾向に及ぼす影響を調査している。身体状況、対人関係、経済状態についての下方比較 (自己評価と同年齢の他者に対する評価の差) は、一般に生活満足度に肯定的な影響を及ぼしている一方、抑鬱に対する下方比較の効果は、独居老人にのみ見られ、家族とともに生活している老人では認められなかった。即ち、下方比較の効果を調整する要因として、居住形態があることが示されている。

下方比較の効果における調整変数の存在を実験的に検討した知見として、Mares & Cantor (1992) がある。事前調査で孤独感を感じている男女老人と然らざる老人 (平均75.1歳) に対し、適応し健康な生活を送っている老人と、不適応に陥り悲惨な生活をしている老人の映像のいずれかを聴取せしめ、その後の気分の変化を測定する実験を彼等は行っている。その結果、孤独感を感じている老人の場合は、悲惨な老人の情報を求める選択的接触の傾向が見られると共に、悲惨な映像を見た後に否定的気分の改善が示された。逆に孤独感を感じていない老人では、適応した老人の情報を求める傾向と、悲惨な映像聴取後の否定的気分の増加が見られた。即ち、孤独感の如何が下方比較の気分改善効果を調整することが明らかである。

Reis-Bergan, Gibbons & Gerrard (2000) もまた、女性老人 (平均71.0歳) を対象に下方比較

と上方比較の効果を実験的に検討している。生活満足度の高い群と低い群に対象者を分けた上、上方比較（適応した生活をしている老人女性、あるいは若い女性）、下方比較（不適応な老人女性）のいずれかの情報の呈示、及び、自分自身の絶頂期の回想の有無、が独立変数として操作された後、将来の主観的幸福感の予測と気分を従属変数として測定する実験の結果、生活満足度の低い群においてのみ、比較と回想に関する次のような傾向が認められている。回想した場合、若い女性との上方比較は高い主観的幸福感をもたらす一方、老人女性との下方比較は幸福度の低下を引き起こすと共に気分は低下している。換言すると、生活満足度の低い老女に限り、回想は若い女性との上方比較による否定的効果を緩和する一方、老人女性との下方比較による肯定的効果を低下させている。

このような結果についてReis-Berganらは、生活満足度の低い老人の場合、絶頂期の回想、即ち過去の自分自身との上方継時的比較は、若い女性との上方比較では同化、老人女性との下方比較では対比をもたらしたと同時に、自分より状態のよくない他者との対比よりも同化が生じやすい、としている。生活満足度の高い群は一般に幸福度も気分も高い水準にあり、社会的比較と回想の効果は見られないことから、生活満足度は下方比較の効果を調整する変数として機能しており、更に、満足度が低い群では、上方比較と下方比較のもたらす効果を回想——継時的比較が調整していると言える。

逆説的幸福度の媒介過程としての社会的比較：身体的健康が衰えるにも拘わらず、老人の精神的健康や主観的幸福度は却って上昇する現象、即ち逆説的幸福度（paradox of happiness）にHeidrich & Ryff（1993a）は着目し、老人の身体的健康と精神衛生の間には社会的比較が介在していることを明らかにしている。老人女性（平均73.3歳）に対する調査を通じて、身体的健康の程度が低い老人ほど身体的健康、加齢への対処、活動水準などについて下方比較の頻度が多く、下方比較の頻度が多いほど主観的幸福度は高く、抑鬱や不安の程度が低いことが示されている。更に、このような傾向は身体的健康の程度が低い老人ほど顕著であることも認められている。

同様の結果が香港の男女老人（平均71.1歳）を対象としたChou & Chi（2001）の調査でも得られている。即ち、身体的健康、経済状態、友人からの支援など、日常生活の幾つかの領域で、それについての自己評価が低いほどその問題について同年齢他者との比較をする頻度が高く、また比較の頻度が多いほど抑鬱が高くなるが、比較が下方比較である場合には抑鬱の程度は低いことが示されている。更に、その傾向は特性自尊心の低い者、統制感の低い者、自己効力感の低い者に顕著であり、それらの個人特性が下方比較の効果を調整していることも認められている。

このような調整変数の作用を実験的に検討したものとして、Bailis & Chipperfield（2006）に

よるカナダの男女老人（平均85.0歳）に対する場面想定法を用い、調整変数として集合自尊心を取りあげた知見がある。自分自身と同年齢・同性の親友が同時に転倒骨折し、その後の回復が自己と親友で異なる、というシナリオを読んだ後に、当該場面での感情評価と自分自身の身体的頑健度などの評価を求めた結果、自分は回復したが親友は回復しないという下方比較シナリオの場合、自分も親友も回復しないというシナリオの場合よりも肯定的感情と自己の頑健さの評価は高かった。同時に、集合自尊心の高い者は肯定的感情への下方比較の効果が見られない一方、自分は回復しないが親友は回復したという上方比較シナリオの場合に否定的感情は高く自己評価は低い傾向が見られた。即ち、下方比較と上方比較の効果の調整変数として集合自尊心が作用していると言える。

一方、Michinov (2007) はフランスの老人女性（平均82.5歳）を対象として、上方比較あるいは下方比較の対象となる人物（健康で活発あるいは不健康で不活発な老人女性）の記述を呈示した後に、気分を測定する実験を行っている。前者では否定的、後者では肯定的な気分がそれぞれ惹起され、それを調整する個人特性として統制感と社会的比較への志向があり、統制感が低く社会的比較志向の高い個人に、上方比較あるいは下方比較の効果が大きいことが予測されたが、それらの仮説は支持されなかった。個人特性測定尺度の内容が老人に適していない可能性が述べられている。

身体的健康と精神衛生との関係を社会的比較の過程が媒介していることを、共分散構造分析モデルを用いて論証している研究も幾つか存在する。Heidrich & Ryff (1993b) は、老人女性（平均73.3歳）への質問紙調査に基づき、主観的幸福感の高さ、健康上の問題や日常生活困難度の低さなどから構成される身体的健康が、身体的健康、家族関係、容姿などについての下方比較の高さと上方比較の低さから構成される社会的比較を導き、更に社会的比較は抑鬱と不安の低さ、生活満足度や感情バランスの高さなどから構成される精神衛生を導く、というモデルの適合性が高いことを示している。なお、身体的健康は精神衛生を直接的に導くことも併せて示されている。

Kohn & Smith (2003) による男女老人（平均76.6歳）への調査では、身体的あるいは社会的活動などを行う身体機能の低下が、身体的健康、自律行動能力などにおける下方比較の頻度の上昇を導き、それがそれらの領域における自己評価の高揚をもたらし、更に高揚された自己評価が抑鬱の低下を導く、というモデルが確認されている。また、抑鬱が自己評価の低下を導くという因果関係を追加することによりモデル適合度が向上することから、下方比較と抑鬱との関係は双方向的である可能性も指摘されている。加えて、下方比較による自己高揚は女性よりも男性で顕著なことも示されている。

更に、Peck & Merighi (2007) は男女老人（平均72.8歳）に対する縦断追跡調査によって、以下の因果モデルの適合性を確認している。即ち、当初調査時の身体的（日常行動の困難度の

低さなど)及び精神的(抑鬱症候の欠如など)健康状態の高さは、自己を他者より上に位置づける比較的評価をもたらし、比較的評価の高さが主観的幸福感の上昇を導き、高い主観的幸福感とは2年後及び4年後の良好な身体的、精神的健康状態をもたらす一方、当初の健康状態は2、4年後の健康状態を直接規定する、というモデルである。なお、当初の健康状態は主観的幸福感を直接導くこと、及び、下方比較が主観的幸福感と健康状態をもたらす傾向は男性でより強く見られることも報告されている。

総括：以上概観した現存の知見によれば、老人期の日常的問題である心身の健康を始めとする生活状態の自己評価について、以下の傾向が明らかであろう。即ち、(1) Suls & Mullen (1982) のモデルとは異なり、継時的比較よりも社会的比較、とりわけ下方比較が大きな役割を果たしている、(2) 共分散構造分析を用いた諸研究で明らかのように、加齢に伴う身体的健康の衰えと精神衛生との関係を社会的比較、就中、下方比較が媒介しており、自己高揚の効果をもたらしている、(3) 孤独な状態にある、あるいは低い健康などが水準にある老人に下方比較の効果が顕著である。

このうち、(1)に関しては、継時的比較が社会的比較の効果を調整する可能性を示唆する知見(Reis-Bergan et al., 2000)もあることから、両者の相互関係について今後更に検討を加える必要がある。また、(3)に関しては、下方比較の効果を調整する要因として、独居老人(Cheng et al., 2008)、孤独感(Mares & Cantor, 1992)、身体的健康(Heidrich & Ryff, 1993a)、特性自尊心、統制感、自己効力感(Chou & Chi, 2000)、1次的統制感(Bailis et al., 2005)、の諸要因が明らかにされているが、これは特性自尊心の高い個人に下方比較による快楽的自己認識が目だつという最近の社会的比較研究に基づく知見(高田, 2011)とは傾向を異にしており、老人期の下方比較の様態について更に分析を加えることが要請されよう。

同じく下方比較の肯定的効果を調整する要因として性別があるが、その結果は矛盾している。Heidrich & Ryff (1993a)をはじめとする初期の研究は、老婆のみを対象としたものが多く、その中で下方比較の効果が確認されたにも拘わらず、最近の研究ではむしろ男性に顕著であるという報告が多い。老人を対象とした研究では、高学歴かつ裕福な階層に対象者が偏りがちであり、かつ社会階層により社会的比較に関わる心理過程はかなりの相違があることが指摘されている(Sherrard, 1994)。したがって、個人間の変動が大きいと考えられる老人層における社会的比較の効果の性差に関する結論は、更なる知見集積を待つ必要がある。

V. 結 語

本稿では、青年期から成人期で顕現する諸問題に対し、社会的比較の観点から検討を加えた

主要な実証的研究を総覧した。それらの各発達時期での諸知見の総括についてはそれぞれの箇所ですでに述べたので、ここでは全体を通じた問題点の幾つかについて言及する。

第1に、本稿の対象である青年期から老人期の各時期の研究を見ると、成人期の結婚あるいは職業生活での社会的比較に関する多くの研究と、青年期での身体像と摂食障害、及び老人期での心身機能の減衰に関する社会的比較を検討した諸研究の間には、明確な志向性あるいは分析視角の違いが認められる。即ち、後者では当該の問題自体が直接の対象とされ、それへの対処をも含む問題の本質を解明しようとする、いずれかと言えば実践的な志向性が濃厚であるのに対し、前者は社会的比較研究の中で問題とされる事項を成人期に特徴的な問題に適用し、社会的比較についての理解を深めようとする、いわば理論志向的な研究が多いことである。

したがって、前者の諸研究では、上方比較と下方比較との関係とその機能、社会的比較における同化と対比の過程、それぞれの過程における情報処理など、最近の社会的比較研究における中心的課題に沿って分析が進められ、当該領域で社会的比較が果たしている心的過程が一定程度明確にされている。それに対し、後者では社会的比較の概念が十分に吟味されないままに用いられ、それに起因する方法的不備を含む研究も散見される。しかし、従来専ら対比効果のみが注目されてきた身体像へのメディアモデルの影響に関し、最近では同化効果をも取り上げた研究が見られるなど事態は変化しつつある。勿論、摂食障害にせよ老人の心理的安寧にせよ、社会的比較だけが関わる問題ではないが、そこでの社会的比較の役割を理解する為には、社会的比較の心的過程を今後更に分析する必要があると考えられる。

第2に、社会的比較の機能に関する発達の差異の問題がある。Festinger (1954) の社会的比較過程説の重点は自己評価機能に置かれていたのに対し、その後の研究では比較の自己高揚機能が中心的課題とされ、現実的にも自己高揚機能が自己評価機能を圧倒することが多いことが明らかにされている（高田, 2011）。今回取り上げた諸研究では上方比較と下方比較に関するものが多数を占めることもそれに合致している。ところが、青年期の身体像に関する諸研究では上方比較による自己評価の低下を示すものが多いのに対し、老人期の心理的安寧に関する諸研究では下方比較の効果が顕著である。一方、成人期の結婚や職場での社会的比較を吟味した諸研究では双方を扱った例が多い。

この傾向の背景には、上述した研究の志向性の問題も考えられるが、社会的比較の機能、とりわけ自己高揚機能に関する、発達の相違があることも仮説的に考えられよう。即ち、青年期には上方比較志向、老人期では下方志向傾向がそれぞれ強まり、その背後に比較の対象となる自己の諸側面における到達可能性の問題がある可能性もあり得る。冒頭で述べたように、社会的比較の生涯発達を論じた理論は Suls & Mullen (1982) のモデルが唯一のものであるが、当該モデルの実証的支持は少なく、かつそこでは比較の自己評価機能のみが問題とされている。自己高揚機能に焦点をあてた生涯発達モデル構築の可能性もあるように思われる。

第3に、本稿で総覧した研究は特記したもの以外は、アメリカ人を対象としている。前稿(高田, 2009)で展望した幼児期から青年期での社会的比較に関する研究でもそうであったが、本稿で扱った成人期以降に関しては、それ以上に我が国での知見が乏しい。例えば青年期女子の摂食障害に関しては日本でも重大な問題であるとの指摘(Nakamura & Hoshino, 1999)があるにも拘わらず、摂食障害と社会的比較との関係を実証的に検討した研究は管見の限り皆無であり、これは結婚や職場の諸問題あるいは老人期の心理的安寧に関しても略同様である。

前述したように、身体像と社会的比較の関係には文化的規範の問題が深く関わっていることは明らかであり、結婚や職場、老人期の諸問題にしても、それが日常生活と密接に関連している以上、文化的要因が何らかの影響を及ぼしていることは論を待たない。更に、人間の心理過程自体が文化的産物であるとの指摘が夙になされていることを考えれば、この状態は奇異の感を免れない。これは実践家と社会心理学研究者双方の怠慢であり、心理学に限定するなら、そこには我が国における研究体制の病根が作用しているとまで極言できるようにも思われる。いづれにせよ、日本文化におけるこれら諸問題についての知見の集積が望まれる。

引用文献

- Adams, J. (1965) Inequity in social exchange. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 2. Academic Press. Pp. 267-299.
- Bailis, D.S. & Chipperfield, J.G. (2006) Emotional and self-evaluative effects of social comparison information in later life: How are they moderated by collective self-esteem? *Psychology and Aging*, **21**, 291-302.
- Bailis, D.S., Chipperfield, J.G., & Perry, R. (2005) Optimistic social comparison of older adults low in primary control: A prospective analysis of hospitalization and mortality. *Health Psychology*, **24**, 393-401.
- Bessenoff, G.R. (2006) Can the media affect us? Social comparison, self-discrepancy, and the thin ideal. *Psychology of Women Quarterly*, **30**, 239-251.
- Blanton, H., & Stapel, D.A. (2007) Introduction to the history of social comparison. In D.A. Stapel & H. Stanton. (Eds.) *Social Comparison Theories*. Psychology Press. Pp.1-8.
- Botta, R.A. (1999) Television images and adolescent girl's body image disturbance. *Journal of Communication*, **49**, 22-41.
- Butler, R. (1989) Mastery and ability appraisal: A developmental study of children's observations of peer's work. *Child Development*, **60**, 1350-1361.
- Butler, R. (1998) Age trends in the use of social and temporal comparison for self-evaluation:

- Examination of a novel developmental hypothesis. Child Development, 69*, 1054-1073.
- Buunk, A.P. (2006) Responses to a happily married other: The role of relation satisfaction and social comparison orientation. *Personal Relationships, 13*, 397-409.
- Buunk, B.P., Collins, R.L., Taylor, S.E., VanYperen, N.W., & Dakof, C.A. (1990) The affective consequences of social comparison: Either direction has its ups and downs. *Journal of Personality and Social Psychology, 59*, 1238-1249.
- Buunk, B.P., Schaufeel, W.B., & Ybema, J.F. (1994) Burnout, uncertainty, and the desire for social comparison among nurses. *Journal of Applied Social Psychology, 24*, 1701-1718.
- Buunk, B.P. & van der Eijnden, R.J.J.M. (1997) Perceived prevalence, perceived superiority, and relationship satisfaction: Most relationships are good, but ours is the best. *Personality and Social Psychology Bulletin, 23*, 219-228.
- Buunk, B.P., Van der Zee, K., & Van Yperen, N.W. (2001) Neuroticism and social comparison orientation as moderators of affective responses to social comparison at work. *Journal of Personality, 69*, 745-763.
- Buunk, B.P. & Van Yperen, N.W. (1991) Referential comparisons, relational comparisons, and exchange orientation: Their relation to marital satisfaction. *Personality and Social Psychology Bulletin, 17*, 709-717.
- Buunk, B.P., Van Yperen, N.W., Taylor, S.E., & Collins, R.L. (1991) Social comparison and the drive upward revisited: Affiliation as a response to marital stress. *European Journal of Social Psychology, 21*, 529-546.
- Buunk, B.P. & Ybema, J.F. (2003) Feeling bad, but satisfied: The effect of upward and downward comparison upon mood and marital satisfaction. *British Journal of Social Psychology, 42*, 613-628.
- Buunk, B.P., Ybema, J.F., Gibbons, F.X., & Ipenburg, M. (2001) The affective consequences of social comparison as related to professional burnout and social comparison orientation. *European Journal of Social Psychology, 31*, 337-351.
- Buunk, B.P., Ybema, J.F., Van der Zee, K., Schaufeli, W.B., & Gibbons, F.X. (2001) Affect generated by social comparisons among nurses high and low in burnout. *Journal of Applied Social Psychology, 31*, 1500-1520.
- Buunk, B.P., Zurrigana, R., Peiro, J.M., Nauta, A., & Gosalvez, I. (2005) Social comparisons at work as related to a cooperative social climate and to individual differences in social comparison orientation. *Applied Psychology: An International Review, 54*, 61-80.
- Carmona, C., Buunk, A.P., Peiro, J.M., Rodriguez, I., & Bravo, M.J. (2006) Do social comparison

- and coping styles play a role in the development of burnout? Cross-sectional and longitudinal findings. *Journal of Occupational and Organizational Psychology*, **79**, 85-99.
- Cash, T.F., Cash, D.W., & Butters, J.W. (1983) "Mirror, mirror, on the wall...?": Contrast effects and self-evaluations of physical attractiveness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **9**, 351-358.
- Cattarin, J.A., Thompson, J.K., Thomas, C., & Williams, R. (2000) Body image, mood, and televised images of attractiveness: The role of social comparison. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **19**, 220-239.
- Cheng, S., Fung, H.H., & Chan, A.C.M. (2008) Living status and psychological well-being: Social comparison as a moderator in later life. *Aging and Mental Health*, **12**, 654-661.
- Chou, K.L. & Chi, I. (2001) Social comparison in Chinese older adults. *Aging and Mental Health*, **5**, 242-252.
- Corning, A.F., Krumm, A.J., & Smitham, L.A. (2006) Differential social comparison processes in women with and without eating disorder symptoms. *Journal of Clinical Psychology*, **53**, 338-349.
- Crandall, C.S. (1988) Social contagion of binge eating. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 588-598.
- Davidson, T.E. & McCabe, M.P. (2006) Adolescent body image and psychosocial functioning. *The Journal of Social Psychology*, **146**, 15-30.
- Dittmar, H. & Howard, S. (2004) Thin-ideal internalization and social comparison tendency as moderators of media models' impact on women's body-focused anxiety. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **23**, 768-791.
- Englen-Maddox, R. (2005) Cognitive responses to idealized media images of women: The relationship of social comparison and critical processing to body image disturbance in college women. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **24**, 1114-1138.
- Erikson, E.H. (1959) *Identity and the Life Cycle*. International Universities Press.
- Evans, P.C. & McConnell, A.R. (2003) Do racial minorities respond in the same way to mainstream beauty standards? Social comparison processes in Asian, black, and white women. *Self and Identity*, **2**, 153-167.
- Faith, M.S., Leone, M.A., & Allison, D.B. (1997) The effects of self-generated comparison targets, BMI, and social comparison tendencies on body image appraisal. *Eating Disorders*, **5**, 128-140.
- Festinger, L. (1954) A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117-140.

- Fischer, P., Kastenmuller, A., Frey, D., & Peus, C. (2009) Social comparison and information transmission in the work context. *Journal of Applied Social Psychology*, **39**, 42-61.
- Frieswijk, N., Buunk, B.P., Steverink, N., & Slaets, J.P. (2004) The effect of social comparison information on the life satisfaction of frail older persons. *Psychology and Aging*, **19**, 183-190.
- Fry, P.S. & Debats, D.L. (2003) Domain-specific social comparison orientations as predictors of health-related quality of life, life satisfaction, and general optimism in late life functioning. *Journal of Mental Health and Aging*, **9**, 243-269.
- Frye, N.E. & Karney, B.R. (2002) Being better or getting better? Social and temporal comparisons as coping mechanisms in close relationships. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **28**, 1287-1299.
- Garner, D.M.(1991) *Eating Disorders inventory-2: Professional Manual*. Psychological Assessment Resources.
- Geurts, S.A., Buunk, B.P., & Schaufeli, W.B. (1994) Social comparisons and absenteeism: A structural modeling approach. *Journal of Applied Social Psychology*, **24**, 1871-1890.
- Gibbons, F.X., & Buunk, B.P. (1999) Individual differences in social comparison: Development of a scale of social comparison orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 129-142.
- Gorawara-Bhat, R., Huang, E.S., & Chin, M.H. (2008) Communicating with older diabetes patients: Self-management and social comparison. *Patient Education and Counseling*, **72**, 411-417.
- Green, M.A., Scott, N.A., Cross, S., Liao, K.Y., Hallengren, J.J., Davids, C.M., Carter, L.P, Kugler, D.W., Read, K.E., & Jepson, A.J. (2009) Eating disorder behaviors and depression: A minimal relationship beyond social comparison, self-esteem, and body dissatisfaction. *Journal of Clinical Psychology*, **65**, 989-999.
- Groesz, L.M., Levine, M.P, & Murnen, S.K. (2002) The effect of experimental presentation of thin media images on body satisfaction: A meta-analytic review. *International Journal of Eating Disorder*, **31**, 1-16.
- Halliwel, E. & Dittmar, H.(2004) Does size matter? The impact of model's body size on women's body-focused anxiety and advertising effectiveness. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **23**, 104-122.
- Halliwel, E. & Dittmar, H. (2005) The role of self-improvement and self-evaluation motives in social comparisons with idealised female bodies in the media. *Body Image*, **2**, 249-261.
- Hargreaves, D.A., & Tiggemann, M. (2009) Muscular ideal media images and men's body image:

- Social comparison processing and individual vulnerability. *Psychology of Men and Masculinity*, **10**, 109-119.
- Heckhausen, J. & Krueger, J. (1993) Developmental expectations for the self and most other people: Age grading in three functions of social comparison. *Developmental Psychology*, **29**, 539-548.
- Heckhausen, J. & Schulz, R. (1995) A life-span theory of control. *Psychological Review*, **102**, 284-304.
- Heidrich, S.M. & Ryff, C.D. (1993a) The role of social comparisons processes in the psychological adaptation of elderly adults. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, **48**, 127-138.
- Heidrich, S.M. & Ryff, C.D. (1993b) Physical and mental health in later life: The self-system as mediator. *Psychology and Aging*, **8**, 327-338.
- Heinberg, L.J. & Thompson, J.K. (1992a) Social comparison: Gender, target importance ratings, and relation to body image disturbance. *Journal of Social Behavior and Personality*, **7**, 335-344.
- Heinberg, L.J. & Thompson, J.K. (1992b) The effects of figure size feedback (positive vs. negative) and target comparison group (particularistic vs. universalistic) on body image disturbance. *International Journal of Eating Disorders*, **12**, 441-448.
- Higgins, E.T. (1987) Self-discrepancy: A theory of relating self and affect. *Psychological Review*, **94**, 319-340.
- Hobza, C.L., Walker, K.E., Yakushko, O., & Peugh, J.L. (2007) What about men? Social comparison and the effects of media images on body and self-esteem. *Psychology of Men and Masculinity*, **8**, 161-172.
- Irving, L.M. (1990) Mirror images: Effects of the standard of beauty on the self-and body-esteem of women exhibiting varying levels of bulimic symptoms. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **9**, 230-242.
- Jones, D.C. (2001) Social comparison and body image: Attractiveness comparisons to models and peers among adolescent girls and boys. *Sex Roles*, **45**, 645-664.
- Jones, D.C. (2004) Body image among adolescent girls and boys: A longitudinal study. *Developmental Psychology*, **40**, 823-835.
- Jones, A.M. & Buckingham, J.T. (2005) Self-esteem as a moderator of the effect of social comparison on women's body image. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **24**, 1164-1187.
- Joshi, R., Herman, C.P., & Polivy, J. (2004) Self-enhancing effects of exposure to thin-body image. *International Journal of Eating Disorders*, **35**, 333-341.
- Kohn, S. & Smith, G.C. (2003) The impact of downward social comparison processes on

- depressive symptoms in older men and women. *Aging International*, **28**, 37-65.
- Krones, P., Stice, E., Batrew, C.B., & Orjada, K. (2005) In vivo social comparison to a thin-ideal peer promotes body dissatisfaction. *International Journal of Eating Disorders*, **38**, 134-142.
- Lockwood, P., & Kunda, Z. (1997) Superstars and me: Predicting the impact of role models on the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 91-103.
- Makkar, J.K. & Strube, M.J. (1995) Black women's self-perceptions of attractiveness following exposure to white versus black beauty standards: The moderating role of racial identity and self-esteem. *Journal of Applied Social Psychology*, **25**, 1547-1566.
- Marcia, J.E. (1966) Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.
- Mares, M. & Cantor, J. (1992) Elderly viewer's responses to televised portrayals of old age: empathy and mood management versus social comparison. *Communication Research*, **19**, 459-478.
- Martin, M.C. & Kennedy, P.F. (1993) Advertising and social comparison: Consequences for female preadolescents and adolescents. *Psychology and Marketing*, **10**, 513-530.
- Meeus, W., Dekovic, H., & Iedema, J. (1997) Unemployment and identity in adolescence: A social comparison perspective. *The Career Development Quarterly*, **45**, 369-380.
- Michinov, N. (2005) Social comparison, perceived control, and occupational burnout. *Applied Psychology: An International Review*, **54**, 99-118.
- Michinov, N. (2007) Social comparison and affect: A study among elderly women. *The Journal of Social Psychology*, **147**, 175-189.
- Milkie, M.A. (1999) Social comparisons, reflected appraisals, and mass media: The impact of pervasive beauty images on black and white girl's self-concepts. *Social Psychology Quarterly*, **62**, 190-210.
- Mills, J.S., Polivy, J., Herman, C.P., & Tiggemann, M. (2002) Effects of exposure to thin media images: Evidence of self-enhancement among restrained eaters. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **28**, 1687-1699.
- 諸井克英 (1996) 家庭内労働の分担における衡平性の知覚 家族心理学研究, **10**, 15-30.
- Morrison, T.G., Kalin, R., & Morrison, M.A. (2004) Body-image evaluation and body-image investment among adolescents: A test of sociocultural and social comparison theories. *Adolescence*, **39**, 571-592.
- Morrison, T., Waller, G., Meyer, C., Burditt, E. Wright, F., Babbs, M., & Gilbert, N. (2003) Social comparison in the eating disorders. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **191**, 553-555.

- Nakamura, K. & Hoshino, Y. (1999) Eating problems in female Japanese high school students: A prevalence study. *International Journal of Eating Disorders*, **26**, 91-96.
- Patrick, H., Neighbors, C., & Knee, C.R. (2004) Appearance-related social comparisons: The role of contingent self-esteem and self-perceptions of attractiveness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **30**, 501-514.
- Peck, M.D. & Merighi, J.R. (2007) The relation of social comparison to subjective well-being and health status in older adults. *Journal of Human Behavior in Social Environment*, **16**, 121-142.
- Posavac, H.D., Posavac, S.S., & Posavac, E.J. (1998) Exposure to media images of female attractiveness and concern with body weight among young women. *Sex Roles*, **38**, 187-201.
- Poran, M.A. (2002) Denying diversity: Perceptions of beauty and social comparison processes among Latina, black, and white women. *Sex Roles*, **47**, 65-81.
- Ruble, D.N. (1983) The development of social comparison processes and their role in achievement-related self-socialization. In E. Higgins, D. Ruble, & H. Hertup (Eds.) *Social Cognition and Social Development*. Cambridge University Press. Pp.134-157.
- Reis-Bergan, M., Gibbons, F.X., & Gerrard, M. (2000) The impact of reminiscence on socially active elderly women's reactions to social comparisons. *Basic and Applied Social Psychology*, **22**, 225-236.
- Rickabaugh, C.A. & Tomlinson-Keasey, C. (1997) Social and temporal comparisons in adjustment to aging. *Basic and Applied Social Psychology*, **19**, 307-328.
- Robinson-Whelen, S. & Kiecolt-Glaser, J. (1997) The importance of social versus temporal comparison appraisals among older adults. *Journal of Applied Social Psychology*, **27**, 959-966.
- Ryff, C.D. & Essex, M.J. (1992) The interpretation of life experience and well-being: The sample case of relocation. *Psychology and Aging*, **7**, 507-517.
- Schachter, S. (1959) *The Psychology of Affiliation*. Stanford University Press.
- Sherrard, C.A. (1994) Elderly wellbeing and the psychology of social comparison. *Aging and Society*, **14**, 341-356.
- Smolak, L., Murnen, S.K., & Thompson, J.K. (2005) Sociocultural influences and muscle building in adolescent boys. *Psychology of Men and Masculinity*, **6**, 227-239.
- Smolak, L. & Stein, J.A. (2006) The relationship of drive for muscularity to sociocultural factors, self-esteem, physical attributes gender role, and social comparison in middle school boys. *Body Images*, **3**, 121-129.
- Stormer, S.M. & Thompson, J.K. (1996) Explanations of body image disturbance: A test of maturational status, negative verbal commentary, social comparison, and sociocultural

- hypotheses. *International Journal of Eating Disorders*, **19**, 193-202.
- Suls, J. (1986) Comparison processes in relative deprivation: A life-span analysis. In M. Olson, C.P. Herman, & M.P. Zanna(Eds.) *Relative Deprivation and Social Comparison. The Ontario Symposium. Vol.4*. Lawrence Erlbaum. Pp.95-116.
- Suls, J., & Mullen, B. (1982) From the cradle to the grave: Comparison and self-evaluation across the life-span. In J. Sulz (Ed.) *Psychological Perspectives on the Self, Vol.1*. Lawrence Erlbaum. Pp.97-125.
- Suls, J., Marco, C.A., & Tobin, S. (1991) The role of temporal comparison, social comparison, and direct appraisal in the elderly's self-evaluations of health. *Journal of Applied Social Psychology*, **21**, 1125-1144.
- 高田利武 (1993) 青年の自己概念形成と社会的比較 —日本人大学生にみられる特徴— 教育心理学研究, **41**, 339-348.
- 高田利武 (1998) 健康と病気の社会的比較 —文献的考察— 奈良大学紀要, **26**, 71-91.
- 高田利武 (2004) 「日本人らしさ」の発達社会心理学：自己、社会的比較、文化。 ナカニシヤ出版。
- 高田利武 (2009) 社会的比較の発達過程に就いて —幼児期から青年期に至る実証的研究の展望— 宮城学院女子大学研究論文集, **109**, 1-39.
- 高田利武 (2011) 新版・他者と比べる自分：社会的比較の心理学。サイエンス社。
- 高田利武・丹野義彦・渡辺孝憲 (1987) 自己形成の心理学 —青年期のアイデンティテとその障害— 川島書店。
- Tennen, H., McKee, T.E., & Affleck, G. (2000) Social comparison processes in health and illness. In J.E.Suls & L.Wheeler (Eds.) *Handbook of Social Comparison: Theory and Research*. Kluwer Academic/Plenum. Pp.443-483.
- Thau, S., Aquino, K., & Wittek, R. (2007) An extension of uncertainty management theory to the self: The relationship between justice, social comparison orientation, and antisocial work behaviors. *Journal of Applied Psychology*, **92**, 250-258.
- Thompson, J.K., Covert, M.D., & Stormer, S.M. (1999) Body image, social comparison, and eating disturbance: A covariance structure modeling investigation. *International Journal of Eating Disorder*, **26**, 43-51.
- Thompson, J.K., Heinberg, L.K., & Tantleff, S. (1991) The physical appearance comparison scale (PACS). *Behavior Therapist*, **14**, 174.
- Thornton, B. & Moore, S. (1993) Physical attractiveness contrast effect: Implications for self-esteem and evaluations of the social self. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **19**, 474-

480.

- Tiggemann, M. & McGill, B. (2004) The role of social comparison in the effect of magazine advertisement on women's mood and body dissatisfaction. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **23**, 23-44.
- Tiggemann, M., Polivy, J., & Hargreaves, D. (2009) The processing of thin ideals in fashion magazines: A source of social comparison or fantasy? *Journal of Social and Clinical Psychology*, **28**, 73-93.
- Tiggemann, M. & Slater, A. (2004) Thin ideals in music television: A source of social comparison and body dissatisfaction. *International Journal of Eating Disorders*, **35**, 48 -58.
- Titus, S.L. (1980) A function of friendship: Social comparisons as a frame of reference for marriage. *Human Relations*, **33**, 409-431.
- Tsiantas, G. & King, R.A. (2001) Similarities in body image in sisters: The role of sociocultural internalization and social comparison. *Eating Disorders*, **9**, 141-158.
- van den Berg, P. & Thompson, J.K. (2007) Self-schema and social comparison explanations of body dissatisfaction: A laboratory investigation. *Body Image*, **4**, 29-38.
- Veroff, J. (1969) Social comparison and the development of achievement motivation. In C.Smith (Ed.) *Achievement-related Motives in Children*. Russell Sage Foundation. Pp.46-101.
- Ybema, J.F., Buunk, B.P., & Heesink, J.A. (1996) Affect and identification in social comparison after loss of work. *Basic and Applied Social Psychology*, **18**, 151-169.
- Wheeler, L. & Miyake, K. (1992) Social comparison in everyday life. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 760-773.
- Wilcox, K. & Laird, J.D. (2000) The impact of media images of super-slender women on women's self-esteem: Identification, social comparison, and self-perception. *Journal of Research in Personality*, **34**, 278-286.
- Williams, J.H., & Geller, E.S. (2000) Behavior-based intervention for occupational safety: Critical impact of social comparison feedback. *Journal of Safety Research*, **31**, 135-142.
- Wills, T.A. (1981) Downward comparison principles in social psychology. *Psychological Bulletin*, **90**, 245-271.
- Wilson, A.E., & Ross, M. (2000) The frequency of temporal-self and social comparisons in people's personal appraisals. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 928-942.
- Wood, J.V. (1989) Theory and research concerning social comparisons of personal attributes. *Psychological Bulletin*, **106**, 231-248.

The developmental aspects of social comparison: A review of empirical findings from late adolescence to old age

Prof. Toshitake TAKATA

Abstract

In spite of recent vigor of the social comparison studies, the developmental aspects of social comparison processes are rather ignored. This article reviewed the available empirical investigations which examine a variety of social comparison behaviors shown by research participants from late adolescence to old age. As a result, relative lack of researches, which (1) incorporate recent findings regarding the social comparison theory, (2) try to develop a life-span development model from viewpoint of self-enhancement function of social comparison, and (3) investigate the cultural differences of social comparison processes, was pointed out.